江戸名所圖會

八 8

明顯山祐天寺 同所西の方五丁斗を隔つ善久院と号も享保年間二世祐海和尚祐天大僧正の遺跡の地を奉して當寺を草創し則祐天大僧正を開祖とし常行念佛の道場として鉦鼓の聲ハ山林に谺せり 此称名ハ開山祐天大僧正臨終の期開闢それより連綿として絶ゆることなし 毎年七月十六日より同廿五日に至る迄の間阿弥陀経千部讀誦修行道俗群参す

本堂 本尊阿弥陀如来 丈長一尺五寸斗 恵心僧都の作にして開山生涯持念のそん像なりとぞ 開山祐天大僧正真像 本堂の龕前に安置す 等身佛にして八十二歳の影像三輪利鑑の作なり

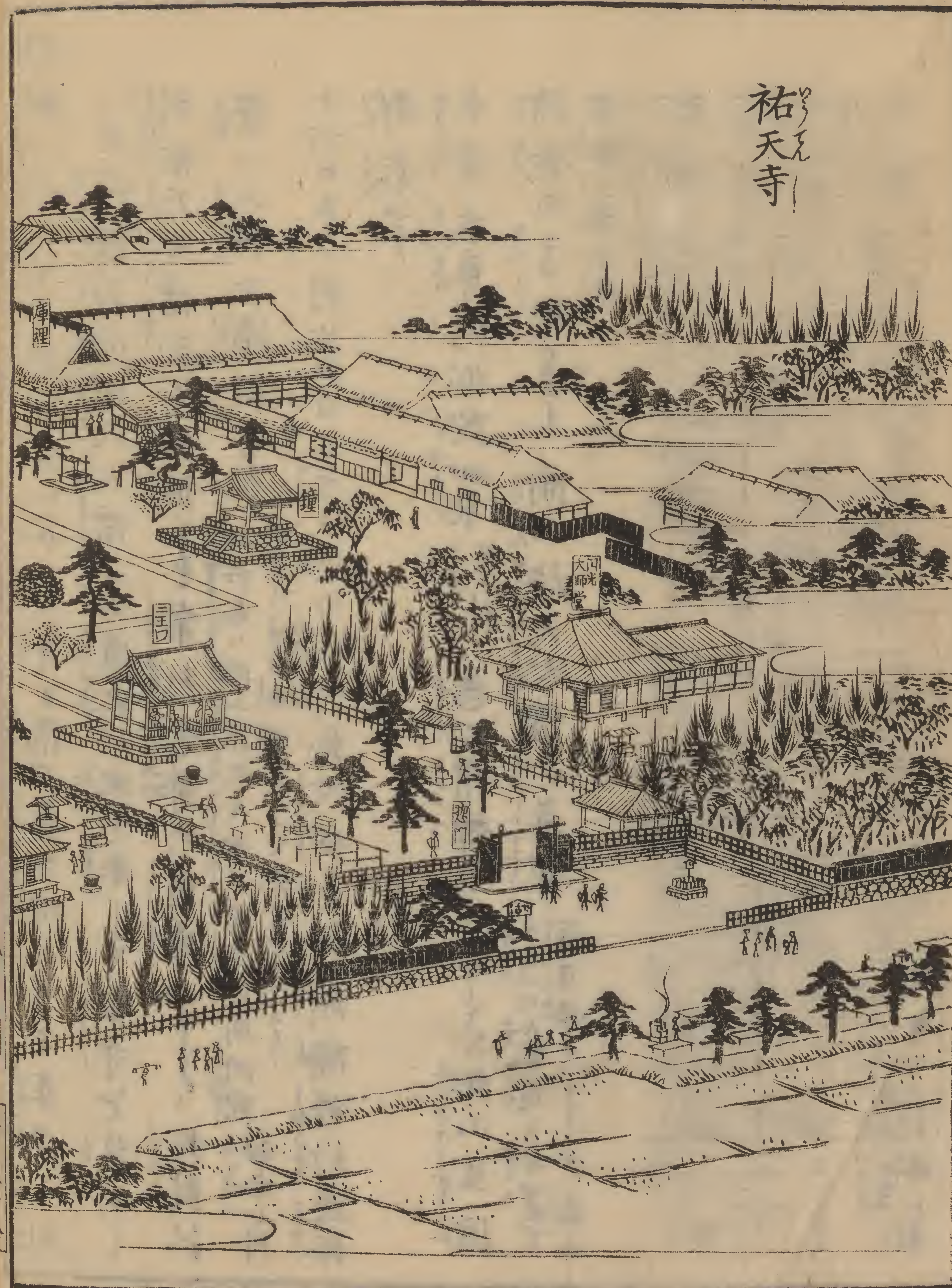
鯨鐘 堂前右の方庫裡の前にあり 一位大夫人桂昌院殿御寄附

圓光大師堂 同じ並びにあり 法然上人在世の時河内國に天野四郎と云強盗ありしが終に上人の化導に帰入し出家して教阿弥陀佛と号す 常に上人の傍にあり随従して教化に預りしが後上人相模國川村と云所へ下向の頃生涯の記念にとて自ら彫造して送りまいらし靈像なりとぞ 故ありて當寺にうつしまつるとなん

經藏 堂前左の方にあり 額經藏の二字ハ祐海和尚の筆

阿弥陀堂 同じ左に並ぶ 開山傳授佛阿弥陀如来と号し 称して恵心僧都の御作佛と号す


勤行鐘
本堂
方丈
玄関
経堂
阿弥陀堂


祐天寺（ゆうてんじ）
庫裡
鐘
三王口
円光大師堂
惣門

るその題なり則僧都一代彫刻の如来ハ此尊像を拝して彫なりけるに此号ありと云
開山大僧正常に有信の輩に浄業傳法の時の持授佛なりと縁起にあり寺僧に問べし
額阿弥陀堂の四字ハ祐海和尚の筆あり

稲荷祠　同し並ひにあり當寺の護法神とす

地蔵堂　同し並ひ二王門の外の左にあり祐天大僧正の本地佛と称しまゐらす恵心僧都の作なり長二尺五寸斗あり元信州松本の光明院に安置せしに寛永十四年丁丑四月四日開山大僧正誕生の日より失ひ享保三年戊戌七月十五日開山遷化の日に至て此霊像再ひ光明院へ帰り顕れ給ふ松本の城主出羽守水野忠周侯の夢中開山の本地ハ地蔵尊なりし霊示あり依自ら其ゆへを記して當寺第二世祐海上人へ送らせられしと其書簡今當寺に傳へて秘蔵せり然に寛政九年丁巳の夏松本の城下倉品七郎右衛門といふ人従来の因縁あるを以て後の城主丹波守松平光行侯へ乞ひ同年十二月廿三日當寺へうつし奉りぬ

二王門　表の左右なる那羅延密迹の二像裏ハ持國廣目の二天を置

額　明顕山　祐海和尚筆

開山祐天大僧正廟　経蔵と阿弥陀堂の間より裏門へ行く左の方叢林の中にあり入口に石地蔵堂あり

開山八十歳影像　麻布一本松の禅室にて了月和尚親写し画くと云

同臨終真影　開山八十二歳の時享保三年戊戌六月中旬より不食して身躰日々に衰へ七月十五日に至りて称念臨終し給ふ同十六日遺骸を倚子に移して諸人に拝せしむ此朝に写せし影にて了月和尚の画なり

開山遺骨舎利　開山命終の後荼毘せしに全身悉く舎利となる多くて廟穴に埋蔵せり今もつて宝塔へ収むる則諸人に拝せしむ

同舌根　是も荼毘の中に宛然として残りしとの縁起に云舌根ハ元火ふしく荼毘の中に壊せずと云ことなし然にかく止るその八累年称名の功徳なり

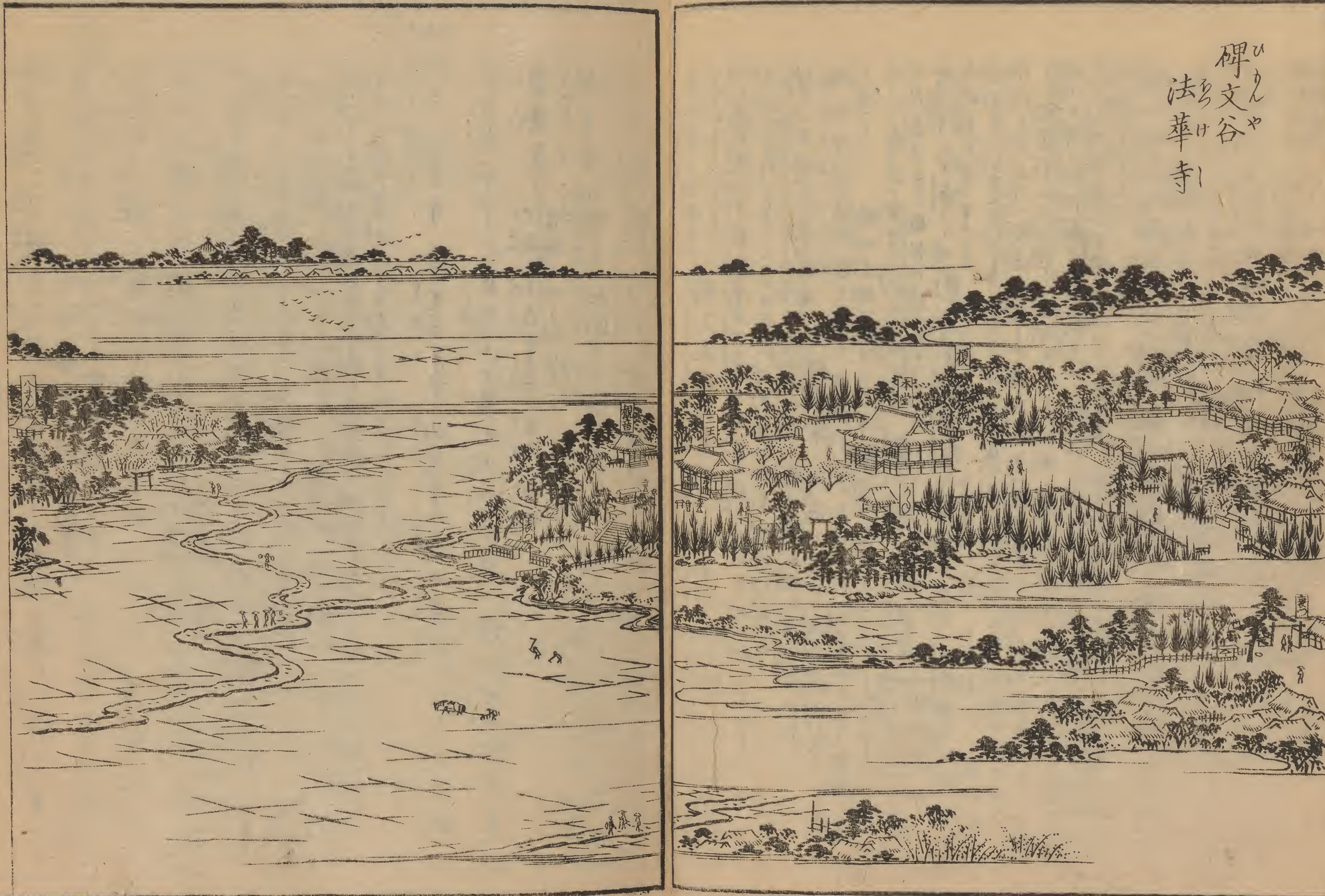
その化導に妄語なき　**開山大僧正書写六字名号**　奇特尤多し就中剣難七太刀のかれありといへとも身代名号狼牙落名号火中出現不焼名号疱瘡守名号等の現益ハ普く世にしる所なり故に寺記にゆづりてこゝにもらす其余の名号奇特尤多し

開山大僧正長悦像　開山小石川の傳通院在住の頃元禄年中瑞春院殿御蔵　大将軍家御前において法問説法ありしを長悦と呼へしと上意ありて賞のあまり御親ら刻ませ給ひしを其後祐海上人へ贈りて當寺に収む此故に毎年鶴姫君様へ進せられし御雛祭の首席につらねさせ給ひしを三月當寺にて雛祭の儀式執行あり

累済度如法衣　**蜀江錦九條袈裟**　増上寺在住の頃開山上人御法号をさつけし時二十五條なり累ハ下総國岡田郡羽生村出観と造りあへる与右衛門といひし者の妻なり顔形類少き悪女なりし心ざまかたくなりしかハ与右衛門是を悪み情なくも絹川といへる川へ突落し殺して後死骸を八同村なりし浄家法蔵寺といへるに葬る其後妻五人迄累ヶ怨念にてとりころし猶六人目の妻の娘菊といへるにとり附し開山大僧正の化益により寛文十二年壬子三月十日の夜に至て累ヶ廿六年の怨執悉く散して生死解脱の本懐を遂せしより普く世に知る所なり猶委しくハ解脱物語といへる草紙にくはしくあり

開山明蓮社顕誉上人　愚心と号す　**祐天大僧正ハ奥州岩城郡新妻邑の産なり**　西村善内といへる者の子にして寛永十九年壬午正月元日生る幼名三之助と云　**檀通和尚に従ひ縁山にて修学**　檀通師に従ひ北総飯沼に在住しける時の現益なり　**世に知る所の累ヶ怨霊解脱の誉ハ尤著し**　此時八師の歳三十六其頃　在住しける時の現益あり怨霊解脱物語といへる草紙に詳なり　**後故ありて武州牛島に潜居す道俗**

碑文谷法華寺



化を蒙る者夥し元禄十二年己卯　台命に依て下總生實の大巖寺に住持し（牛島の庵室より直に大巖寺に入院あり世以て希有とす）同十三年戊辰飯沼弘経寺に轉し紫袍を賜ふ又辛未江戸小石川の傳通院に移て正徳元年増上寺に住せしる（大僧正に任せらる縁山第三十六世なり）後目黒の地へ隠栖せしも竟に享保三年戊戌七月十五日化寂あり（當寺ハ則祐天大僧正終焉の地なり）一世の行状并書寫しゝふ所の名號の奇特ハ世人普く知る所なり（開山臨終の頃まで名号書写怠られし人ありて是をとゞむ開山云く恵心僧都ハ一期の間如来を彫造し其中にして往生を遂られたり我も又弥陀の名号を書写しつゝ其中に往生すべしとて命終の日に至る迄一日も怠らざりしとなり）

妙法山法華寺

碑文谷にあり祐天寺の南半道斗にあり吉祥院と号す天台宗にして東叡山に属す本堂本尊ハ釋迦如来脇士ハ文殊普賢なり（里諺に今存する所の堂宇ハ飛騨匠甚五郎か作る所なりといへり）

觀音堂（堂前左の方にあり本尊ハ十一面觀音の立像にして參籠の人此堂に通夜す）

榎木（釋迦堂の後左の垣添にあり至つての古樹なり當寺開創已来のものなりとぞその株に垣を繞す）

二王門　金剛密迹の二像ハ佛工安阿弥の作なりといへり（靈威尤著しく流石世人篤信をいたす中古寛政紀元の年己酉の頃より後十二年斗の間靈驗著しく頻に都下の人群參して道もさりあへざりしが其後やゝ止たり）

當寺其先ハ慈覚大師の開創にして天台宗の古刹なりしが後日蓮の宗化に歸し日源上人中興開基たりしも竟に元禄に至て舊貫に復し元の天台宗を唱ふ（今堀内妙法寺に安置せし日蓮大士の像ハ當寺よりうつせしといへり）境内櫻楓の二樹多く春秋ともに頗る壮観たり

碑文谷八幡宮

同所耕田を隔て南の方一町斗にあり相傳ふ畠山重忠の崇信せし御神なりといふ（神躰ハ秘物なりと云或ハ云束帯の銅像なりといへり）別當ハ天台宗にして法華寺末神宮院奉祀す（昔ハ此地の農民の内宮氏なる人社司たりしとなり此宮氏ハ重忠の家臣の遠裔なりといふ或人云八幡宮の西にあたる地ハ往古の鎌倉街道にして路傍に古碑ありしとなりされどもいつの頃にや此地の土民鎮守八幡宮の社地へ埋藏しけりと或ハ日源上人大卒都婆に碑文を書して埋めし日源の名なりともいへり又江戸鹿子といへる草帋にハ忠玄といへる沙門卒都婆一基を建こゝによりてかく唱ふるともありて共に詳ならざるものを姑く）

九品山淨真寺

碑文谷より一里あまりを隔て西南の方奥澤村にあり淨土宗にして唯在念佛院と号す（京師知恩院に属せり）延宝六年戊午珂碩


奥澤村
浄真寺
九品佛
本堂
客殿
方丈

和尚開基なる所の浄刹にして九品九會の霊場なり

本堂 本尊阿弥陀如来丈六の坐像なり 額 龍護殿 當寺珂慶上人筆

内佛本尊阿弥陀如来像 聖徳太子四十二歳の時一切衆生の災難を除ん為に彫造ありしとなり 珂碩上人は年十八のとき深川霊岸寺の傍に庵室をむすび念佛修行せしが或る暁一人の老僧此本尊を背負来りて其来由を示して珂碩上人に附属あり夫よりして上人の智徳盛にして此霊像の助に賤の道俗利益をかうむる者少からず遂に九品佛彫造の資財を足しぬより諸佛天三万六千躰悉く成就しけりといふ

地蔵尊 本堂の向小堂の中に安置を開山珂碩上人の本地佛と称す 恵心僧都の作なり 此本尊昔丹波國箕濃山に立せ給ふ その麓に住む大江繁時といへる悪逆無道の猟人一時山に至りて急雨に逢ひ件の地蔵堂に休らひし時堂宇破壊し佛躰雨露の為に浸されたまふを憐み其身の自冠の笠を本尊に覆ひまゐらせし因縁にあり 一度死して冥府に赴けるとも此尊像繁時の苦患に代り給ひ再び娑婆へ返らしむとなり 其後故ありてかの野山に移されたまひしを了山法印當寺開山上人の道光を慕ひ是を附属ありしとなり

開山珂碩上人像 客殿に安置す上人生前如来の霊示再三あるに依て是を彫造

此像ハ如来の御告三度に依て彫刻ある所 背像に納置れし開山自筆の書あり其文に曰 聚生の諸災難を除き未来ハ必浄土に導べし 末代の輩此像に結縁せよ

万治元年戊戌七月廿四日 珂碩 四十二歳 印

此故に世人除厄の影像と称せり

曼陀羅堂 本堂の左にあり中尊ハ弘法大師の作の三尊の弥陀像を安置す 往古深川大島村の念佛堂にありしを堂守浄性といへる沙門當寺へ移しあづくる其餘五智如来および超載永劫佛五劫思惟佛なとを安置す 此尊像ハ面貌らうかにして他の像に異なり

中品堂 同じ右に並ぶ 中品中生 中品上生 中品下生 以上三品の阿弥陀如来の像を安置せり

上品堂 本堂に向ふ 上品中生 上品上生 上品下生 以上三品の阿弥陀如来を安す

下品堂 同左に並ぶ 下品中生 下品上生 下品下生 以上三品の阿弥陀如来を安す

以上九品の阿弥陀如来九躰を安置す各座像にして一丈六尺あり 佛像一躰毎に圓光ありて附まる所の小佛一千十一軀 九躰共にあるを何れも開山珂碩上人の彫造なりしが開山常に一日三銭を貯へ造佛の費に充 寛文四年より同七年に至りて其備ふるに四年竟に九品の弥陀像全く成就せしを収りとあり 此地ハ初ハ霊岸寺の地にありしが洪波の為に破らる 後延宝六年戊午ことごとく此地に移されとあり 或云珂碩上人諸堂不成して遷化せらるゝ 從弟珂憶上人河州玉手山安福寺よりきたりて建立をとぐ 九品堂の額ハいづれも珂憶上人の筆なり

開山堂 上品堂の後古城跡堤の上にあり 開山珂碩上人七十二歳の影像なり 奥澤九品佛縁起には椅子にかゝり杖を股に置とあれども立像にして合掌せり 躰相あり 於可孔

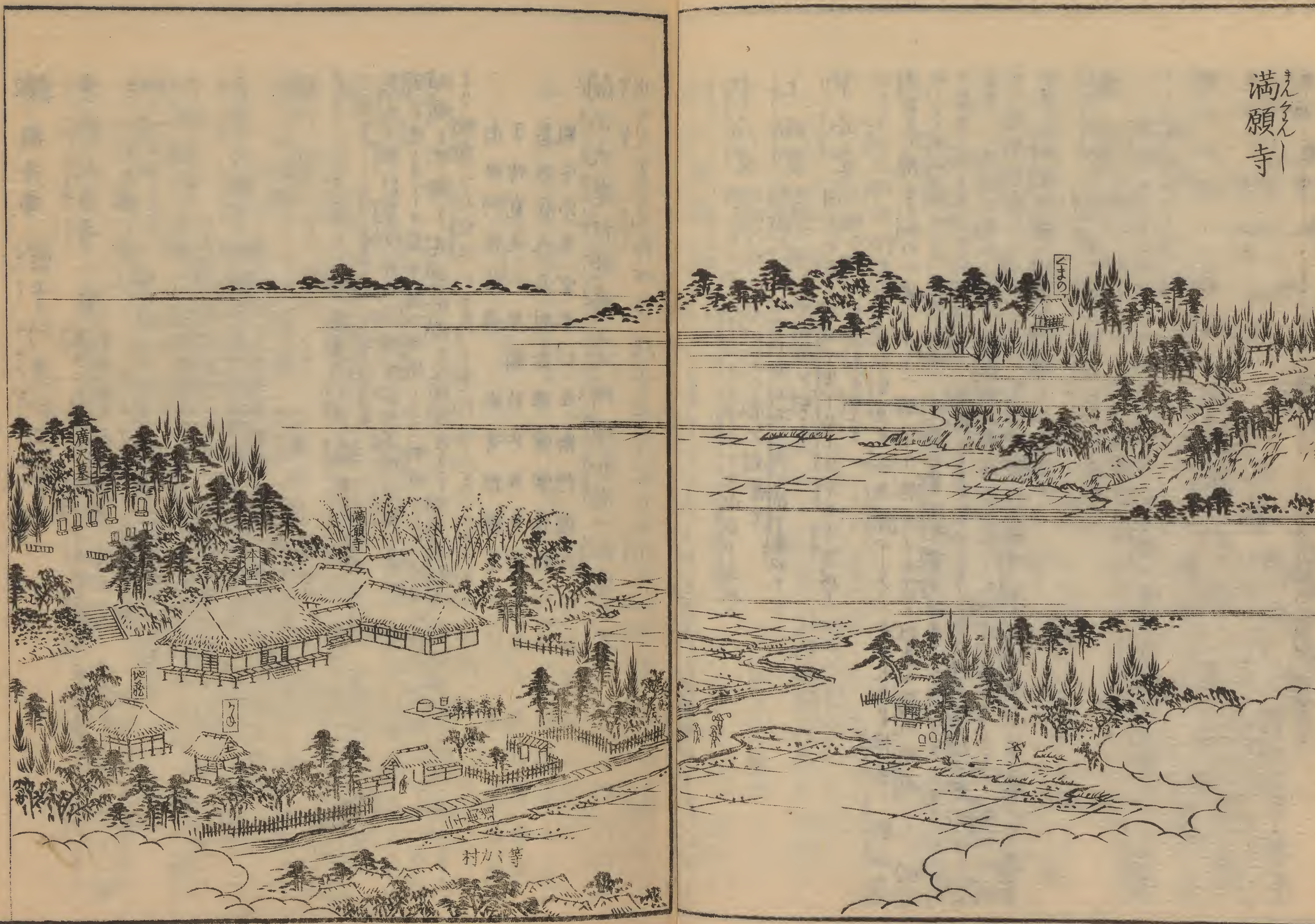
開山珂碩上人廟 開山堂の右のつゞきにあり 奥の院と唱ふ 近頃石の離を造り儼く

星の井 開山廟の前小坂の上にあり 有信の人偏に称名すれハ白日といへども水底に衆星の光を現すといへり

鐘樓 本堂の右にあり 九品の阿弥陀如来の像を鋳上ぐ 寛永五年に造る所の鯨鐘なり

樓門 同じ所にあり 樓下中に金剛密迹の二王の木像を置り 樓上に二十五菩薩の像を安置す

満願寺（まんぐわんじ）



額 般舟場　當寺珂慶和尚筆

芝枯大名号一幅 〔長十三間巾九尺白布十反を合せ用ゆ珂憶上人の筆なり草木國土悉皆成佛の意地に住しく書れし故に草木に掛〕是ハ六字の通を芝枯に名とす

阿弥陀如来画像 〔珂憶上人の筆中にも細字の六字名号を以て妙なる来迎の姿を書つらねし像なり〕

十念名号 〔珂碩上人臨終の頃筆せられしといふ徒弟の筆師の別を惜みて請ふ故に名残名号とも号く其余高徳の筆の名号多し〕

亡者の帷子 〔昔芝西應寺前鳥羽屋三郎左衛門なりける人の妻難産にて死せし後珂碩上人の十念脈符を授て冥府の苦みを遁れ成佛しけるとなん〕よろこひ其證として亡霊の残し置くる帷子なりといへり

亡者の文 〔堤氏何某の先妻女の死灵珂碩上人の徳化によりて成佛しけるよろこひの〕あまりかの先妻の亡霊後妻の一文不通ありしものへ用ひて出る文ありと云

撮待大茶釜 〔當寺に収む毎年四月千部の時此茶釜にて茶を煎じて〕衆人に施す寛文年中山城宇治の茶師宮本仁左衛門といふ人継母の怨念によりて病を受けりしに當寺開山珂碩上人の利益により継母の死灵佛顆をさとりて仁左衛門病頓に平愈す其頃珂碩上人再與ありし深川大島村常念佛堂の堂守浄正のもとへ報恩の為宮本仁左衛門より寄附ありしとなり来由ハ寺記に詳なり其銘に曰く

南無阿弥陀佛　奉寄附鑵子一口　為二親菩提
于時寛文八年霜月廿五日當九百日　武州豊島郡
葛西荘大島村念佛堂常住物沙弥浄性施主山城
國宇治里宮本仁左衛門鑄物師釜屋八右衛門

開山大蓮社超誉上人珂碩和尚ハ松露と号ス俗姓ハ野村氏武州の人なり元和四年戊午正月元日に生る江戸覚真寺の圓岩に投しく雑染し十八歳にして業を珂山和尚に受〔珂山和尚ハ下総生実大巌寺に住せし〕和尚後年武陵の霊巌寺に住持せる頃師も亦従つてかしこに移る初越後國泰叟寺に住し後此地の郷民の招に應じ歳七十七の時武州に帰て世田ヶ谷奥澤に幽棲を〔當寺起ス〕遂に元禄七年甲戌十月七日化寂を〔本朝浄土高僧傳に元禄八年報壽八十許にして入寂をとあるハ誤なり〕師の姿貌温雅にして慈恩尤深く奇験孔多し凡在世の感應ハ勝数をへかたし其うち最煥灼として人々是を傳ふ〔以上浄土傳燈系図上人傳本朝浄土高僧傳の〕意を採る

當寺ハ不断念佛の道場にして閑寂玄隠の浄舎なり毎年四月三日より同十二日に至る迄十日の間阿弥陀経千部読誦修行七月十六日より同十八日迄虫拂にて當寺什宝を出し諸人に拝せしむ

此寺境内ハ昔小田原北条家の属将吉良家の老臣大平左馬〔或出羽守とも〕といひし人の構へなりし塁隍の旧跡なりとぞ今も北より西南の方へ



繞まく堤の形空堀の跡を存す後門の方ハ大沼なくありし
とあり今ハ耕田となれり

大平山奥澤新田村にあり 大平出羽守の砦の跡なりといふ 按ニ等々力村満願寺所蔵の天文弘治の古文書に大平清九郎といへる名往々みえ又大平左馬と云も此人のすゑなるべし

致航山満願寺 二子街道等々力村道より右にあり新義の真言宗にして山城醍醐報恩院に属せり開創の時世詳ならず中興開基を定栄法印と号す慶安年間寺領に寄附の朱章をたまふ本尊ハ大日如来なり當寺ハ世田谷の吉良左兵衛佐源頼康の祈願所にして其頃ハ頗る盛大の寺院なりしとあり 世田谷私記追加ニ云當寺往古政忠の男経弁住職せし豪徳寺所蔵の吉良系図にも政忠の子経弁満願寺開とあり當寺ニ天文弘治天正等の年号ある吉良頼康北條氏康氏政等の證状或ハ書簡等をへて十八通ほとあり其文中に世田谷深澤村の満願寺とあるハ其故をしらず昔等々力ハ深澤ニ属し小名なくありしにや又ハ深澤より等々力へ引移しなるか今志らへかたし又同古文書の中一通にを医王山満願寺とあるときハ後世致航山に更めしなるへしされと猶可考のこと 總門の額致航山の三大字ハ小篆にして廣澤先生の筆又本堂の向拝に掲く満願寺と書せしハ

息男九皐の書なり

大藏村年貢四十貫皆納 石井戸新開寄進満願寺へ一貫分
文淺二七百五十文之済 ○未二百五十駄 掃部之
芝村十一貫皆納 高田分二十貫皆納
坂戸河原十二貫皆納 難済分五貫 皆納

弘治二年丙辰十二月十八日 吉良家朱印

世田谷之内満願寺之事山居敷同寺領分之田畑任為来之儀寺家
再興有之於稀以下動行之義修之殊更寄細於永代修造守之可分此
旨之致旨

天文廿一年壬子二月大吉日

左兵衛佐判
藝音寺

世田谷之内深沢村満願寺分領之年諸役之儀一向不可有之
為後日證状如件

天文二十三年甲寅卯月大吉日

左衛門佐康判
満願寺

於當寺山満願寺再興可為永代諸役不入者也 為寄進之 不可有之
不可有此旨相守為後日證状如件

甲寅二月吉日

左衛門佐康判
満願寺

此古文書満願寺ゆかりの農家などに散在して全からずとのへり

廣澤先生之墓 同境内堂より後の方岳の上にあり
廣澤先生ハ細井氏通称を次郎太夫と唱へり或ハ思貽菴蕉林菴等の号あり
江戸に遊んで書法を雪山に学び北島雪山なり後に柳澤侯に仕へ後致仕して城西
龍山に隱る紫微字様觀鵞百譚撥鐙真詮篆體異同歌奇文不載酒字林長歌
等の著述あり碑面左のごとし

正面 廣澤先生細井君之墓

左面 豪德院不孤有鄰大居士

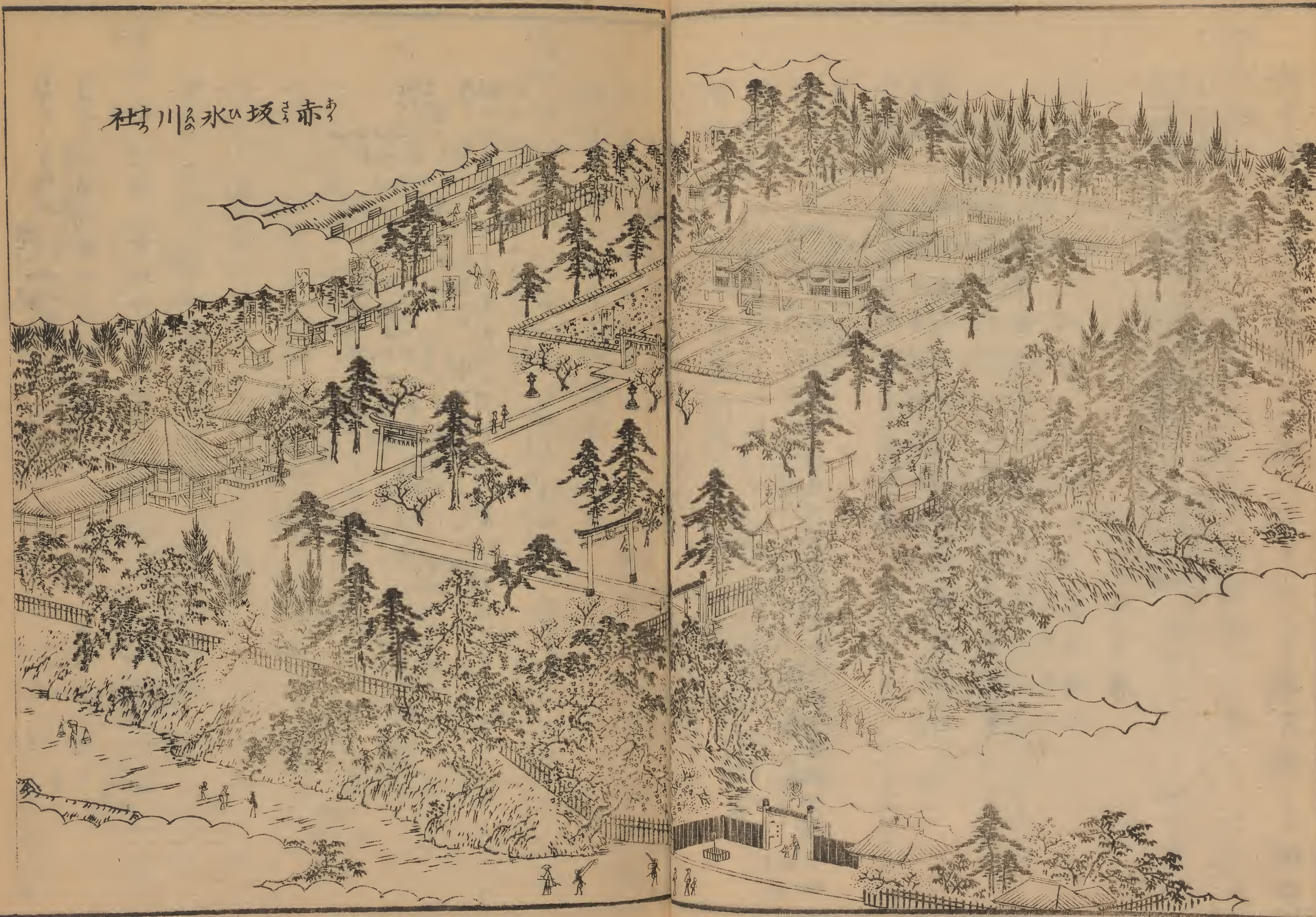
背面
諱知慎字公謹號廣澤姓藤原氏
細井父知治母山本氏
萬治元年戊戌十月乙亥八日壬申
生遠州懸川
享保二十年乙卯十二月己丑廿三
日戊子卒于江戸城西于寝享年七
十八

右面 孝子知文建

其余先生の父母及ひ息男九皐等まで悉く細井一家の塋域と思しく建置たり
ふる中にことごとく同姓の人の墓碑あり 孝子知文とハ則ち九皐のことなりといへり

赤坂御門

糀町の方より青山へ行道赤坂への出口なり 此御門ハ
北斗形とて江戸御城の御構へ多き中にも殊更勝れたる縄張


赤坂氷川社

なりとのみ 或人の説に赤坂ハ茜山の辺の坂なれハかく云と 按に赤坂の地名ハ永禄二年小田原北条家の所領役帳にも江戸赤坂六ヶ村千葉殿所領をとあるも武蔵國風土記に荏原郡赤坂庄とあり今ハ豊島郡に属せ

氷川明神社 赤坂今井にあり 別當ハ聖護院派の觸頭にして大乗院と云 祭神當國一宮に相同し 此所を世に三河臺といふ 天和の頃松平参河守様の屋しきありしゆへ名とす

赤坂の惣鎮守にして祭礼ハ隔年六月十五日永田馬場山王権現と隔年に修行す

江戸名勝志拠鹿子等の草帋に當社元一木村にありしを享保十五年己酉今の地に遷座社を造営ありと云 諸書に見えたり 按に當社を古呂故宮とし又享保中一木より今の地にうつし奉るよし諸書に記しあれとも詳ならず 貞文江戸図に古呂故宮と称するものち今の一木に記し 氷川明神ハ同繪図に今の地に記しありされハ各別の社なるへし 江戸名所記ハ天暦年間江州甲賀郡に蓮林と号けし天台四明の法灯をかゝけ一念三千の観行を凝し沙門ありて東國遊化の頃此所に一夜を明し夢中に霊示を得て十一面観音の像を感得して安置し一本の観音と称す夫より後其後治暦二年丙午関東大に旱魃を民當社に雨を祈るに験あり氷川明神と崇めまつるとあり

古呂故天神社 同所一木の地赤坂田町にあり 或ハ小六に作る 別當ハ洞家の禅宗にして清徳寺と号く

武蔵國風土記残編曰 荏原郡赤坂庄小六天神 或古呂故 圭田三十五束三毛田天武天皇三年甲戌十一月始行神禮有神戸巫戸所祭大巳貴與少彦名國韓神也號小六者以古呂故國之名也云云

按に紫の一本に此大明神元當國八王子の辺に木呂子と云所あり其所の氷川明神を此所へうつせしを道灌の書に木呂子の某かと云ふありと云又同書に及び江戸名所誌などの書に慶長の頃関東の小六とて美貌の聞えある馬追ありしか此赤坂に住せし常に氷川明神を尊信し後其家富て依て社の破壊を再修す故に後に小六の宮とあれとも誣と云へきし江戸めくりにも小六明神を日本武尊の旧跡ありとあり諸説紛々として詳ならす姑く風土記の説を取る猶可考

信康山龍泉寺 同所一ッ木町道より右側にあり 浄土宗にして花洛知恩院に属せり 開山を随流和尚と号く 寛永十一年の開創なり 當寺仏元和尚ハ扶宗の志厚く曾て字信録千巻を著し刊行して普く学徒に示せり 尾州の産なり 當寺に子安観世音を安置せり 聖観音にして伝教大師の作なり 又同し相殿に薬師仏をも安せり 同作なりと云 世に一木観音一木薬師と号す 本尊ハ立像御丈三尺余の弥陀如来 行基の作なり 脇士観音勢至の両像ハ作者しらす 又境内天満宮の宮ありて稲荷を相殿とす

一木辨天
龍泉寺
松泉寺
専修寺



天満神の神像ハ東叡山慈眼大師作らせらるゝ所なりとぞ云傳ふ

平河山浄土寺　源照院と号す同所龍泉寺より半町程南の方同じ側にあり浄土宗にして縁山に属す本尊阿弥陀如来ハ座像四尺餘作者詳ならす開山ハ教誉聖公上人と号す中興を源蓮社本誉利覚一故と号けるゝ當寺昔ハ御城内平河口の辺にありしを元亀三年今の地に移されしと云

一行山専修寺　同所寺町にあり當寺も縁山に属する所の浄刹にして本尊阿弥陀如来ハ恵心僧都の作 丈三尺 開山ハ寂蓮社曇誉上人と号す昔ハ青山にありて勢至菩薩を安せし草堂なりしか永禄年間開山上人一字の梵宇とし其後赤坂氷川明神の辺に移りしを又寛永に至て同寺町に地をかへられ遂に元禄に至て今の地に移せり 往古より安置の勢至菩薩の霊像ハ今猶當寺に存せり金銅にして甚古佛なり

一木原　今赤坂傳馬町の裏通僅に一木町の名を残せり昔ハ此辺なべて一木原といひ矢盛荘七郷の中にて古き名なりと云中古より上下と二ツにわかれ川上一木ハ四谷鮫が橋の辺をいふ今四谷にしてに坂に禅閣薬王寺といふ薬師如来の霊場あり昔其境内に大木の欅ありし是で一木と云又下一木ハ此赤坂にして同所清岸寺中に薬師あり是も薬王寺の霊像と同作なれバ共に一木薬師の称ありむかしハ此寺にも大樹の欅ありしとぞ按るに後人次と書しを彼大欅ありしによつて一木と書改めたると云伝ふ　北条五代記大永四年正月十三日北条氏綱上杉朝興に打勝献の首ども實撿し一木原に旗打揚作法のごとく勝関を執行ひたるのよし見えたるを　北条家の所領役帳に大田大膳亮所領の中に一木貝塚の地名を加へたり貝塚ハ糀町にありされハ糀町の辺も一木の内なりと云り或人云此地町屋になりしハ天正十九年の頃なりと

狩野興意墓　同所三分坂下霊鳳山種徳寺の境内にあり當寺ハ大徳寺派の禅園にして昔ハ相州小田原にありしを天正十九年糀町に引る後又當所に移さる開山ハ東光知灯禅師と号す医王水も當寺の霊泉なり

今井古城址　氷川明神の西北の方松平藝州侯の中屋しきの地をいへり今井四郎兼平が城址ありといへ紫の一本といへる草紙にハ斉藤別當實盛の城とし或ハ田子先生義賢の出城なりともいひ伝ふれども共に詳ならず　北条家の所領役帳に大田新六郎殿辺丹後守といへる人此地を所領に加ふ又今井氏家系に宮内少輔勝行北条家より此所を所領にあづかるとあり

赤根山　紀州公御中屋敷の地をいふなり昔ハ此地に多く茜を産せし故に茜山とよびたるとなり今紀伊國坂と呼ふ地昔ハ赤坂と称へしとなり赤根山の坂なれハかく赤坂とぞ号けたりと云

圓通寺舊跡　同所寺町にあり此地申の方より寅の方へ向ひて下る坂を圓通寺坂と云も此故なり今此地に佛智山圓通寺といへる日蓮宗の寺あれとも古の圓通寺とハ異なり往古爰に在せし圓通寺の洪鐘ハ圓通坊といへる沙門建立せる所にして其銘ハ深草元政法師の撰せる所なり其鐘今ハ亡びたりといへども古き銘を存せんが為草山集に出るを以てここに記して其旧跡を失ハざらしむ


種徳寺
三分坂

赤坂圓通寺鐘銘並序
武州赤坂圓通寺募鑄千斤銅鐘備乎十二辰之候
按大集經菩薩應類悲願化作十二時獸在宝山中
修法緣慈而爲一切精魅之主制彼擾亂護持世界
圓通之舉其意在茲住持僧某甲於人乞銘於余因
以十二獸弁之句勸爲十二韻贈焉客曰雖然如其
似遊戲何余曰諸佛菩薩爲衆類示種々身現種々
土設種々法以至吹螺擊鼓鳴鐘悉是莫不遊戲故
云遊諸世開如幻師如兒戲余亦勞學之人也會作
此銘又遊戲翰墨爲佛事其爲似遊戲也亦宜
銘曰
鼠山流光人未驚
虎狼野干氣縱橫
龍宮高處擊華鯨
馬腹忽變聖胎成
猿啼霜降月色清
狗不夜吠王舍城
牛王出世振梵聲
兎角方便誘群情
蛇室睡破覺心生
羊鹿牛車休復輿
雞人未唱客先行
猪觸金山轉崢嶸

崑崙山玉窓寺　同所右側青山家の邸第の間にあり禅宗中にて開山ハ普光禅師開基ハ青山氏忠俊の女玉窓秀珍大姉より起る寺号とも本尊観世音の像ハ中将姫香を以て是を製する所となり（青山ハ赤坂の西渋谷よりハ北なり此地のうちより麻布の郷に属せり天正の後此地を青山播磨守忠俊にたまふ其頃ハ渋谷筋への街道も共に備への地なりしく邸広かりしより其中間に小路を開き兄弟路を隔て住居せしなり忠俊の寺ハ道より北にありて玉窓寺と云則当寺是なり又道より南にあるを幸成の寺とす今ハ梅窓院是なり或人云此地ハ天正の頃山口重政の第宅ありしを後聟の高木主水正正次に地を割く与へられしとあり左ありて後此地を青山家に賜ふといへり其地の広かりしよりいつしか青山と唱へ来るなり）

百螺山鳳閣密寺真言教院　当寺ハ醍醐の院室にして戒定慧院と号し諸国呪験末寺の総綱なり本坊ハ和州吉野郡鳥栖山に在て開基根本理源大師諱を聖宝僧正と号す光仁天皇乃皇子葛聲王の令子なり弘法大師の肉弟真雅僧正に投して剃度し蛍雪の功年を積南都の諸名公に参して法相三論華厳唯識を学ひ慧業日々に進み給ひしかハ万乗の聖主一時の公卿尊師の徳を仰慕しまふと浅からさりし時に宇多天皇寛平元年己酉尊師年五十八大和国金峯山に毒龍栖とあり霖雨洪水五穀登らさりし山中修歴の徒もこれかために廃絶せしに於て天皇宸襟を悩し給ひ師に詔を下して毒龍を降伏せしむ師勅を奉り

金峯に分入て法威を震ふて龍を伏し抖擻修行の道を再興し
次て奏聞を經て吉野郡に一寺を創建し給ふ鳳閣寺是なり即
尊師の上足貞崇僧正を以て第一世とし昌泰三年始て此處ニ
於て峯受灌頂の密法を興行したまふ爾来七百餘年を經て元禄
年中中興俊尊僧都寺號を東都に移して一派總網の役寺
となし　神祖御由緒の地遠州白山二諦坊康松院を兼領して
天下泰平國家利民の御祈願所とし毎年の四月八日七月十九日
ニハ順逆二峯の神事柴燈護摩の儀式あり此日諸人群參す
當寺本尊不動明王ハ靈驗の尊像にして里人出世不動尊と
稱して常ニ詣人あり脇壇にハ神變菩薩理源大師の像を
安置す寺内に三峯權現稲荷の小祠あり境内に櫻樹有暮春
の頃清賞あり此樹ハ當寺の一代俊賢僧都葛城山より種を
取しめてもと昌平坂の舊地に殖て高間櫻と名つけたる名木

なりしが寛政年中聖堂御造營の節替地を賜ひて當寺も
今の處に移されし刻舊樹ハ枯て僅に蘖生の若木を存し
高間櫻の名を遺せり當寺の西隣ハ即梅窓院なり

長青山梅窓院　寶樹寺と号す青山久保町道より左側にあり
淨土宗にして京師知恩院に屬す　當寺ハ青山家累世の布金の佛閣なり　本尊阿弥陀
如来の像ハ聖徳太子の作なり當寺ハ寛永年間戴蓮社頂譽
冠中南龍和尚開基し觀智國師を請して開山祖とす　國師ハ縁山中興開山なり
惣門の額長青山の三大字ハ黄檗悦山の筆なり

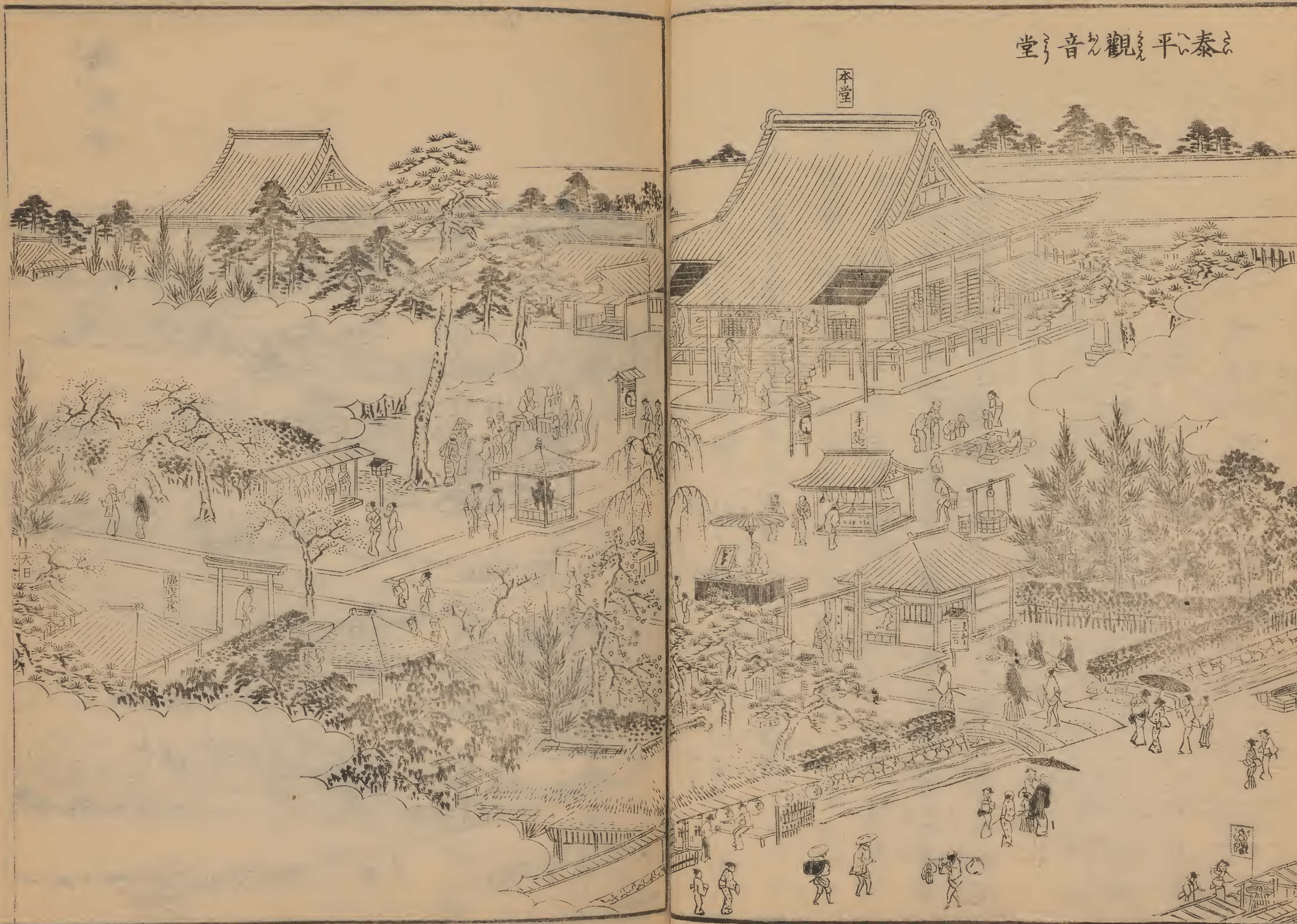
一

泰平觀世音　自然銅の丈三寸三トの千手大悲の靈像なり天竺佛と稱して不空三藏傳持し鑑真大師天平十五年來朝の頃齎來し聖武帝に献り南都大佛殿の傍にありしを源頼義公兄弟奥州追討の頃此靈像を奉持して陣中守護とせり凱陣の時奥州伊達郡に安置ありしく青山家に傳りし後又當寺にうつしまゐらすと云　靈驗いちじるしとて常に參詣絶す

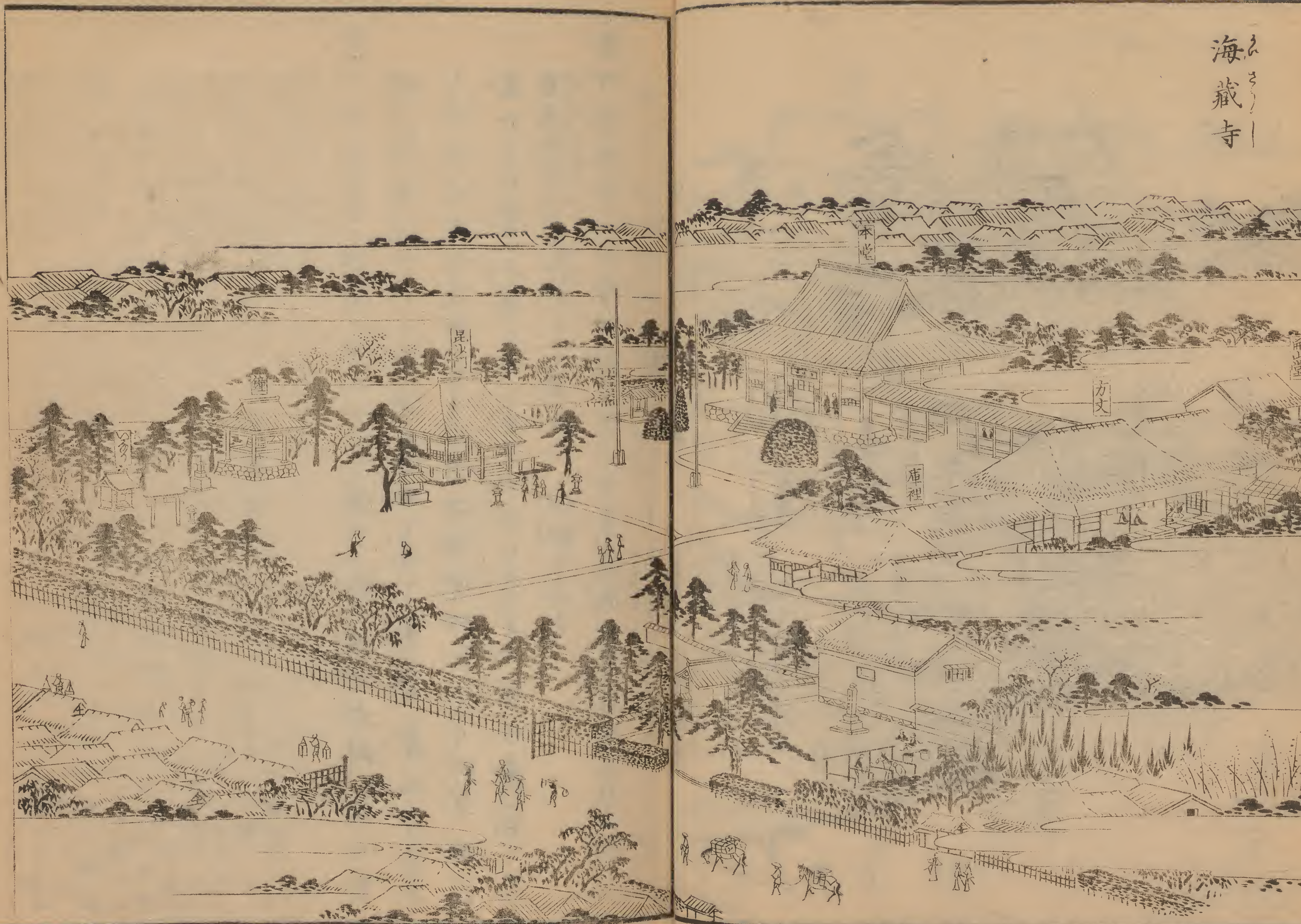
羅漢堂　中尊ハ紫銅の釋迦左右ハ十六阿羅漢并ひに二十五菩薩等の像を安置す

鯨鐘　樓に掛る寶永七年十一月當寺第八世法蓮社壽譽的上人の時旧鐘を鑄改んとせしに或夜龍女夢中に告て云く我今畜身を解脱せんが為一面の鏡を携來り師に願はくハ是を加へらるゝならバ佛果を得せしめなんとあり夢覚て後枕上に一面の

泰平観音堂



海蔵寺（かいざうじ）



鏡を存せり所是れを寺とし其鐘をも加へて終に洪鐘成就を依其證として夢に見えし所の龍女は宝光布龍大姉と法号を授へらる鏡の面に其号を鐫まへしむ

楔地蔵尊 慈覚大師の作なりといふ當寺九世順誉上人北總行徳の海濱湊村の法傳寺にのませし頃夢中靈應によりて同所の海岸にして感得あり海岸楔ありて本尊を得たまひし於て其楔と思ひしハ則此本尊なり故に名とも記しき此海容精舎に鎮座ありて永く衆生を度せんとなり依て一社に奉すと云ふ

百済稲荷 享保の始和州百済より縁山へ下向の僧に

拾櫻 當寺第二世峰誉上人門前にして苗木を訪ひ植

親哉うましとして今堂前に存まる所の無技櫻なり

虚空蔵堂 卵塔の奥にあり本尊ハ座像にして高尺二尺ちりまあり當寺順誉上人作られしといふ

青山海蔵寺 同所一町ちりまを隔て乾の横町右側にあり黄檗派の禅宗にして始ハ海蔵庵と号す寛文十一年井伊侯夫人掃雲院殿の営建なり其頃鉄眼禅師をして此草庵に居らしむ竟に正徳三年に至て公許を蒙て一字の蘭若とす 菊岡沾凉云開山宝州和尚と云々 當寺より唐板の一切経を出せ

熊野権現社 同所東南の方三丁斗を隔て原宿町にあり祭る所ハ南紀の熊野権現に同しく三社あり青山の鎮守にして祭礼ハ隔年九月廿一日に修行を別當ハ真言宗にして浄性院と号す

心見観音 同北に隣る天台宗にして竹園山教学院と号す本尊ハ聖徳太子の真作といふ

南命山善光寺 同所百人町右側にあり信州善光寺本願上人の宿院にして浄土宗尼寺なり本尊阿弥陀如来ハ御長一尺五寸脇士観音勢至の二菩薩ハ共に一尺つつなり稱徳天皇の景雲元年八月十五夜法如尼和州當麻の紫雲庵にして念佛誦持の頃信州善光寺の如来来現ありしを拝したまひ直に一刀三禮にして其尊形を摸さる是則當寺の本尊なりとぞ

當寺ハ永禄元年戊午の創建にして始ハ谷中にありしを中興光蓮社心誉知善上人明観大和尚の時宝永二年台命に依て此地へ遷されたるとあり 今谷中に善光寺坂と号るハ其旧地なるが故にして其旧跡ハ今の玉林寺の地なりと云

什宝に中将姫自の毛髪を以て製造まる所の六字名



熊野社（くまのやしろ）

名号より

観音堂 本堂の左に並ぶ堂内観音百躰を安ず秘仏ハ聖観音にして其丈二尺あまりあり恵心僧都の作なり当寺むかし谷中にありし火災にかゝりし時自ら火中を遁れ出給ひし霊像なりといへり故に火除ともまた火災の時飛うつり給ひしによりて飛観世音とも称するとぞ

物見塚 一名を去我苦塚ともいふ百人町の通り田村下総守邸の中にあり相伝ふ渋谷の金王麿が物見の塚なりと此塚に登りて四方を顧望すれバ二三里が間ハ手にとる如く遠くハ冨士筑波信甲相武の青嶽房総の翠巒画くがごとく憂悲苦悩を去に依て号とすとかや 或人云此ものミ塚のたぐひ府中むさしのあたりにありかしこにありし昔ハ府中野火留の辺り向の原野にて秋とも秋の果もなく月の入べき山の端もなき所にて旅人の道に迷ハさらん為に所々にかゝる塚を築き置て其によりて望めハ道筋ことごとく見ゆる様にそなへしものなりといへり又府中の北に冨士見塚或ハ八国山などといふたとひ四五箇所に存せり此所にあるも又其ならひなるべし又或人云去我苦塚と云ハ申楽塚の誤なるべし昔此所に申楽興行ありし旧跡なるゆゑに此名ありて物見塚も又見物の人の登り居たる所なれバ物見塚と唱へしなるべしと云々未其是非をしらず すぐ背の鎌倉海道の旧跡此塚の下に僅にあり

笄橋 青山長者が丸の谷間の小溝に架せり 里俗云昔ハ此川を[illegible]といひ或鶴が谷に作れる鈎匙とす 菊岡沾涼云往古六孫王経基佩刀の笄を此地の関守に与へられしより名とすと故に笄橋といふ又ハ経基橋とも号くるといへども臆説なるべし笄ハ和名加美左之と訓じ髪搔とし其余髪搔に因める和名の諸説ハ繁きをもてこゝに略す 按に笄橋ハ国府方谷橋なるべし世に長禄年間の江戸の旧図と称するものに渋谷の辺を国府方といへる地名あり永禄二年小田原の所領役帳にも森孫三郎といへる人の江戸の所領の内に国府方といへる名を注せり是等を合せ考ふるに此地を昔国府方と称せし地なるべし其谷合に架せし橋なれバ国府方谷橋と唱へしを後に通音なり俗に谷間に市谷越谷鳩が谷などいふごとくつゞけて唱へしより後人髪搔に因る謬をハなせしと此かへしより

渋谷長者墳墓 同所松前家の第宅の地にあり小高き塚にして頂に松樹繁茂を相伝ふ応安の頃迄此地に冨農ありて是を渋谷長者と称せしとなり 今同所百人町の南を長者が丸と唱ふるも其宅地の旧跡なれバ其長者が子孫近き頃まで[illegible]なりといへり

百姓町 [illegible]とあり 按に江戸砂子に渋谷百姓町岡部家の別荘の地ハその昔冨民慶福といひし者の宅地ありとあるを又青山恩田の松平藝州侯の別荘に稲荷の叢祠ありて其前に古き石の燈籠あり其棹石に康暦二年十月日願主四郎太夫と刻せり是を渋谷長者建立のものとを拠ハ四郎太夫慶福ならしと称せしかやされど其姓氏名も知るべからず江戸砂子に渋谷長者の名ハ宗順といひなるとあるを

通明観 渋谷岡部家別荘の号なり風景他に越四時共に美観なり



あをやま
青山
ぜんくわうじ
善光寺
玄関
客殿
庫裡
本堂
三社宮
手水や
二王門

笄橋

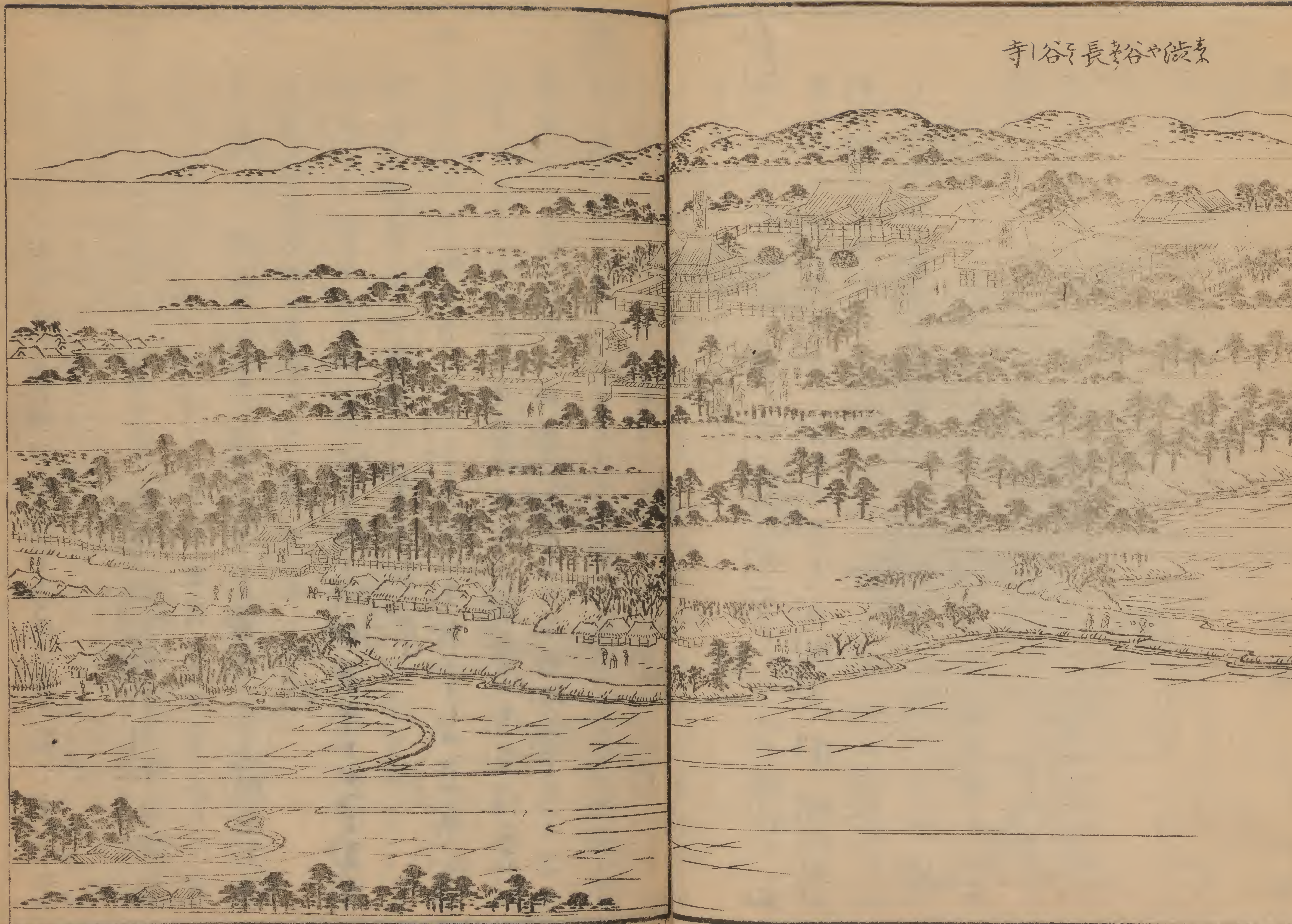


土民云此地ハ往古渋谷重國旧舘の跡とも又ハ冨民慶福といひしものゝ住し跡なりともいへり

普陀山長谷寺　同所にあり曹洞派の禅窟にして江戸檀林の一室なり野州冨田の大中寺に属す本尊十一面観音の像ハ和州長谷寺の観音の摸形にして立像二丈六尺あり御首の中に法丈四寸許十一面観音の霊像を安置せり則和州長谷寺の本尊と同木の樟にして同作なりといへり開山ハ門庵宗関和尚より當寺昔ハ赤坂溜池の上にありて龍雲院といひしを天正十二年甲申此地に移し寺号をも改むるといへり　或人云當寺昔ハ山口氏重政の開基にして青山の中に建立し龍雲院乃号を寺号とし山口家の香花院たりしとなり由緒家の記録によるとぞ故ありて離檀ありしとなりこれと

古佛倉　本堂の右にあり世の霊佛霊神の像を安置して庫中に充満せり此地の古仏内藤勘助秀治といへる人當寺へ納る所にて百四十一躰ありと云世に渋谷長者とりて題なくんとも

當寺境内ハ古松老松翁鬱として常に寂々寥々たりこれハ座禅



素淡や谷を長く谷し寺

公案の為よ便あしくを佛目祖風をあふくかを勤てよろしかる
へくなん

氷川明神社　渋谷川の端よあり相傳ふ右大将頼朝卿の勧請
なりと則此地の産土神ゆして祭礼ハ九月廿九日なり此日社前
ゆく角力を興行を別當ハ天台宗ゆして恵日山薬王院宝泉寺
と号を慈覚大師の開基なるハ藥師如来之作者詳あらす

渋谷川寺前を流る此北の端よ源秀山室泉寺とよへる真言
律の寺院あり閑寂玄隠の地なり 道項法如比丘も爰ま住せる

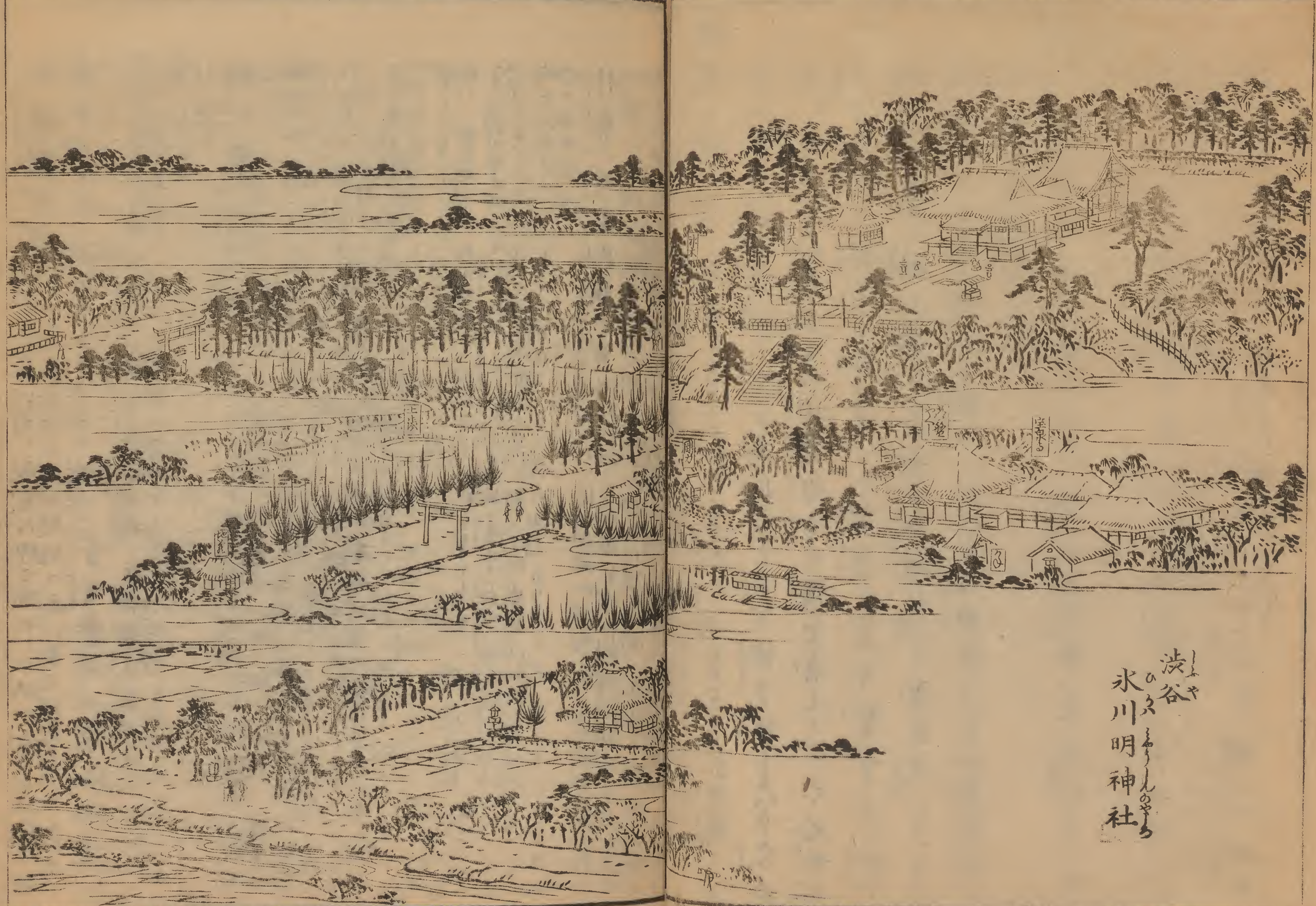
金王麿守佛正觀世音　上渋谷慈雲山長泉寺とよへる禅院に
安置を本尊觀世音ハ運慶の作ゆして則金王麿か信あるとし
靈像なりとよへる開山ハ瑞翁和尚中興ハ不中的と号を

鶴谷　同所ふありとよへとも今あとくかし傳云建久二年右大将頼朝
卿飼まし和の鶴此地よ巣を作る故ふ鶴谷 或ハ又鶴峯とも云ふ
なり羽澤とのふも同所よありといへり 羽澤ハ花谷妙心寺派の禅宗 普光山吸江寺と云ありし

朝霧か滝　是も同所よありとよへとも未た其地を志らく里談よいふ
昔此地よ渋谷宗順とよへる富民あり女を撫子姫とよひ容貌
衆よ勝たり一年弥生の頃圓證寺の櫻を看んとして父母其
女を誘引て彼寺よ往きしふ朝霧とのふ可髪ありて姫を
戀慕し竟よ思を遂さるを恨ミ此滝の下よ身を沈めりとのへ
其傍よ小さき岡あり願山とのふを其塚なりと云又東の傍よ
圓證寺の旧跡もあり

渋谷八幡宮　同所中渋谷ふあり此所の産土神とを　祭礼ハ八月
十五日なり

本社祭神　應神天皇一座　社記ふ云く此神像ハ上古弘法大師豊前國
宇佐八幡宮の告あるふより志らて
山城國鞍馬寺ふ安置しまりしを渋谷次郎高重護持して當社の神躰と
あかむると云　本地佛阿弥陀如来の像ハ慈覚大師の作なり圓證阿闍梨
東福寺創建の時縁脚の憎求りて擁与せしとなり


渋谷
氷川明神社

矢拾観世音 社前にあり 慈覚大師の作なりしく金王麿が信心の霊像なりとぞ或ハ保元年間の戦ひに此観世音敵の弓矢を多く拾ひあつめ味方の陣中へ入給ひしよりかく称しまつると云

子安薬師如来 同所にあり 龍宮出現の尊像なりとぞ義朝誕生の時龍宮より出現し又頼朝を尾張国幡屋に生の時も守護ありしとぞ仏躰に念珠をかけさせ世俗是を安産守護の念珠と唱へ大に崇信せり

金王桜 一名憂忘桜とも号たりしとぞ伝云往古久寿の頃源義朝鎌倉亀か谷の館に植られしを金王丸に給ふの後此地に移し氏神八幡宮の瑞籬にうへるとなり或社記に云文治五年七月頼朝公奥州泰衡退治凱陣の頃当社に詣給ひ太刀一振を収め給ひ又金王丸の影堂に立寄り其誠忠を感じ給ひ鎌倉亀か谷より桜一株を移しまて金王桜と号られたるともあり又相州の一本とのつる冊子に紀州亜相頼宣卿の御母堂養珠院殿此桜の実を庭に植させらるに生立て花も開んとせし頃八幡の社内ありける元木の桜既に枯しより家臣渋谷善入といふ人ハ金王丸の遠裔なれバ他の人の植るゝんよりハ祖先の孝養ゆかりあるへしとて件の実生の桜を善入に下し給ふ善入恭しく是を拝受して其枯株の跡へ植継たる今の桜是なりと云せり

鎮座の松 境内本社の前左の方にあり 大永四年五月十三日北条氏綱として江戸の朝奥高輪の原にて合戦の時氏綱の後陣大道寺八郎か小杉をまつりて渋谷へ攻入放火せ其餘煙当社を焚ふ此時神躰此松樹の上に遷りとゞまりありし故に此名ありといへりむかしハ社地に三十六株の神木ありしが今ハ僅に古松五六株社地の辺に存せり

什宝 月輪御旗一流 社記に云く後一条帝の長元元年五月平忠常北總にて兵乱を起し近国を掠む源頼信朝臣忠常追討の勅旗として秩父の峯に八流の旗を収め其内日月の二流ハ武基に給ハり大宮の仙北金沢城を攻落せるに依て義家朝臣基家を召れ此軍勝利ありしも全く八幡の加護によるとて寛治六年正月義家朝臣凱陣の時谷盛庄へ立寄らせ給ひ月の御旗を八当社にとゞめおかれしとも此御旗をみだりに拝する者あらバ神罰ありとて能登阿闍梨深く社壇にをさめ置る写しを出し置まゝ諸人に拝せしむるハ写しなり 開帳の時節

兜建観世音 社記云源義家公陣中奉持の霊仏なりしく後年基家に給ハり重家あし金王丸篤信なる信せりと云云

獅子丸太刀 河崎土佐守基家仙北金沢にて猛威を振ひ城を攻破る其頃勧賞として義家朝臣より給ふといへり

毒蛇長刀 金王丸長田か館野間の内海にて勇ひを振ひしも此薙刀の威徳ありとぞ

六孫王経基髪搔 当社へ納められしより経基より権守興世に給ふを義家朝臣奔擲是にもとづく

社記曰当社ハ高望王より五代の後裔村岡五郎良文か曽孫秩父別当武基の一子に同十郎武綱といへる英雄あり寛治三年六月清原武衡同家衡か猛威を摧き奥羽の間に勢を揮ひ名誉を天下に輝かしぬ故に将軍義家朝臣是を感じ勧賞として其子六郎基家 河崎土佐守と云由社記にみゆ に武蔵国谷盛荘を給ふ 谷盛一に矢盛に作る 此庄に七郷ありしとぞ所謂渋谷 赤坂 代々木 麻布 飯倉 一ツ木 今井等是なりと云 依基家勝


金王八幡社
本社
拝殿
弁天
本堂
東福寺
金王ざくら
裏門
地蔵
表門



地を撰び同六年正月始て釆邑の地に當社を営建し金王麿迄代々氏神と称しける重嚴なりけるとぞ別當ハ天台宗にして渋谷山東福寺と号す相傳ふ六孫王経基の開創にして昔ハ親王院と呼しとかや開山ハ圓鎮僧正と号す養和元年百十一歳にして化寂ありしと云々

金王麿影堂 同所向ふ側叢林の中にあり八幡宮社記に云く金王麿十七歳の時主君義朝の命により鎌倉に赴く頃其母別れを惜み悲歎の涙に沈む依て金王麿自ら姿を造りて母堂の許に残しとゞめけると云々 其像ハ鐵衣二刀を帯せる容形なり

按に金王麿祖先ハ高望王より五代の後裔村岡五郎良文が曾孫秩父別當武基の子同十郎武綱其子を六郎基家といふ此時に至て始て渋谷を以て氏とす同く一子重家河崎平三大夫後従五位下に任し土佐守と云 [illegible] 當社八幡宮に祈請しけり永治元年一子を儲く其八月十五日に生る金剛夜叉明王の化身なりし靈なるを以て上下の文字を借用して金王麿と名付け保元物語を以て考ふるに金王麿ハ左馬頭源義朝に仕へし童なりと見ゆ 説に金王麿ハ庄司重國の子なりといへとも時代違へるに似たり [illegible]



起し待賢門の軍に打負尾張國野間の内海にあつて家人長田庄司忠宗が
もとに落伸ましましを長田心かはりして浴室に義朝を弑する金王麿うち
をもらし走り出て都に赴きかたきを後都に登り義朝の妾常盤が
もとに来り其ありさまをつぶさに告後義朝の跡をとぶらひまゐらせんが為出家して
諸國を修行し其終る所をしらずとあり金王丸より渋谷と唱ふるよし縁起にみえたり
重家寛治六年渋谷の姓を賜ふと云あれども違へり系図を見るに重家の
子重國其子高重其子金王丸とあり社記には重家一子なきをうれへて八幡宮へ
祈りて授る所金王丸とのみ高重ハ金王丸より後にして文治年中頼朝時代の人
なりといふ
と違へり

金王麿産湯水

同所一町ばかり西の方堀の内といふにあり
誕生池とも号く八幡宮の社記に一度此霊泉に觸る者ハ
齢千歳を保つと云伝ふとあり此辺すべて渋谷氏居館の地
なりし土人城跡と称し馬場の形築地の跡など存せり古井
こゝかしこにあり

東鑑 治承四年庚子八月二十六日入夜定綱盛綱
高綱等出營根深山之處行逢醍醐禪師全成相伴
之到于重國渋谷之館重國乍喜憚世上之聽招于
庫倉之内密々羞膳勧 下畧

同 書養和元年八月二十七日渋谷庄司重國次男
高重竭無貳忠節之上依令感心操之隠便給知行

渋谷下郷所濟乃貢等所被免除也云云

河崎庄司次郎高重宅舊趾　同堀の内にあり土俗傳へ云此重國ハ違論のことありて六郷の河崎へ引移られし其頃此地にありし山王の社をも彼地へ引うつしぬ其旧地に稲荷の叢祠を残し留めらる

姉尾平次左衛門光景旧館地　是も同所にあり今も光景か馬を冷したりといへる小池あり旱魃にも涸るゝ事なく霖雨にも溢るゝ事なし常に岩間をもり出て清冷たり傍に駒繋榎と称するありし光景か愛せし安達栗毛といひし駿足を繋ぎて水を飼ひしといへり

甘露水　同所にあり里俗傳へ云天慶年間六孫王経基朝臣此地に旅宿ありし頃此水を掬て味美にして甘露のごとくなりと褒詞ありしより名とせりとぞ

玉の池　同所にあり里人云く天文の頃天下大に旱魃し河水ハ流を絶し池沼ハ平地に異ならす時此水涌出せる事常に倍せり此里に住る一女子水を掬んとして水器の中に手鞠の形に一顆の宝珠を得たり玉精其女子に託して云く是ハ是れ八幡宮の神器なり大永の兵火をさけて此井中にあり直に神祠に収むへしとあり依て里民大に恐れ謹て是を神祠に収むるとぞ此宝珠今渋谷八幡宮に収むと云　此故に玉の井とも唱へけりしといへり

神仙水　八幡の西にあり相傳ふ往古空鉢仙人此谷に入て不老長生の仙丹を煉りし靈泉なり故に神仙谷とも云となり鉢山といふも法道仙人の鉢此所に自ら飛来る故に号ともといへり

冨士見坂　渋谷宮益町より西へ向ひて下る坂を云　斜に芙蓉の峯に對ふ故に名とす　相模街道の立場にして茶店酒亭


冨士見坂一本松

あり麓の小川に架せる橋をも冨士見橋と名つけしを 相州街道の中坂の数四十八ありとあり此冨士見坂ハ其首ありといへり

道玄坂 冨士見坂の下耕地を隔て向ふの方西へ登る坂をいふ 此坂を登りて三丁程行ハ岐路あり直路ハ大山道ゆきつく三間茶屋より登戸の渡また二子の渡へ通す右へ行ハ駒場野の御用屋敷の前を通て北澤淡島へのみち 世田ケ谷へ行道あり 道玄或ハ道元とも作る 里諺に云大和田氏道玄ハ和田義盛か一族なり建暦三年五月和田の一族滅亡の後其残黨此所の窟中に隠れ住て山賊を業とせし故に道玄坂といふとあり

東鑑廿一云 建暦三年癸酉五月二日壬寅和田左衛門尉義盛率伴黨忽襲将軍幕下謂件與力衆者嫡男和田新左衛門尉常盛同子息新兵衛尉朝盛入道三男朝夷名三郎義秀四男和田四郎左衛門尉義直五男同五郎兵衛尉義重六男同六郎兵衛尉義信七男同七郎秀盛此外土屋大学助義清古郡左衛門尉保忠渋谷次郎高重横山権守時重中山四郎重政同太郎行重土肥先次郎左衛門尉惟平岡崎左衛門尉實忠真田与一義忠カ子梶原六郎朝景同次郎景衡同三郎景盛同七郎景氏大庭小次郎景兼深澤三郎景家大方五郎政直同太郎遠政塩屋三郎惟守以下盛重被討取父義盛年六十七殊ニ歎息ス於今者勵合戦無益云云揚聲悲哭迷惑東西遂被討于江戸左衛門尉能範所従云云同男五郎兵衛尉義重年三十四六郎兵衛尉義信年廿八七郎秀盛年十五以下張本七人共伏誅朝夷名三郎義秀年三十八並數率等出海濱棹船赴安房國其勢五百騎船六艘云云又新左衛門尉常盛年四十二山内先次郎左衛門尉岡崎余一左衛門尉横山馬允古郡左衛門尉和田新兵衛入道以上大将軍六人遁戦場逐電云云

按するに大和田ハ大多和なるべし三浦一族の中に大多和と号するあり東鑑ニ治承四年八月廿二日三浦次郎義澄同十郎義連大多和三郎義久子息義成和田太郎義盛同次郎義茂中略三浦を出て参向すとあり或人云道玄ハ沙門にして此地に昔一宇の寺院ありて道玄寺と称しけり故に坂の名に負ひ来れるともいふ一説なり

道玄物見松 道玄坂を登りて七町ばかり西の方同し街道大坂と云より此方右側にありしが明和の頃枯たりしかハ伐られしと云 木の周五かゝへ程ありて根より三丈ばかり上ゆへて東西へ廿間ばかり南北へ十六七間ばかりも枝をなひきて蒼くたりしかハ炎暑の頃ハ行人この樹下にやすらひてりしとなり今駒場坂の下用水堀の傍に一株の古松あるを混して道玄松と称すれとも一本松と称してこの松と別也 里諺云道玄此松樹に登りて往来の人を見下し小賊に命して衣服物の具を奪ひ採しめたりしとなりとそ


駒場の野

駒場野 道玄坂より乾の方十四五町ほどを隔らる代々木野より續きたる廣原にして上目黒村に属せり雲雀鶉野雉兎狐の類多く御遊猟の地なり 此地の宮林ハ享保の初御狩場に定させられたりとなり又此地の里正加藤氏某ハ小田原北条家の臣加藤丹後守といへる人の後裔にして小田原落去の後此地に縁あるを以て蟄居し後に農民となるとなり丹後守ハ武州多摩郡稲根崎にて討死せしとなり其一族の墳墓稲根崎圓福寺といふに存せりとぞ

蛇池 官林の中にありといふ享保三年此地御遊猟の地に定させられし翌年の夏風雨烈しく此池中に栖ありし蛇ここを立去りしといふ故に此名あり

鐘鋳塚 駒場野の中にありと云方九尺斗高サ七八尺斗なりとぞむかし此所にて梵鐘を鋳る旧跡なりと云傳ふれども何れの寺の鐘なるやあきらかならず富士見坂の下ハ水流下渋谷が水掛口の地の名に道場ヶ崎と云あり ゆゑに此近辺に盛大の寺院ありしなるべし

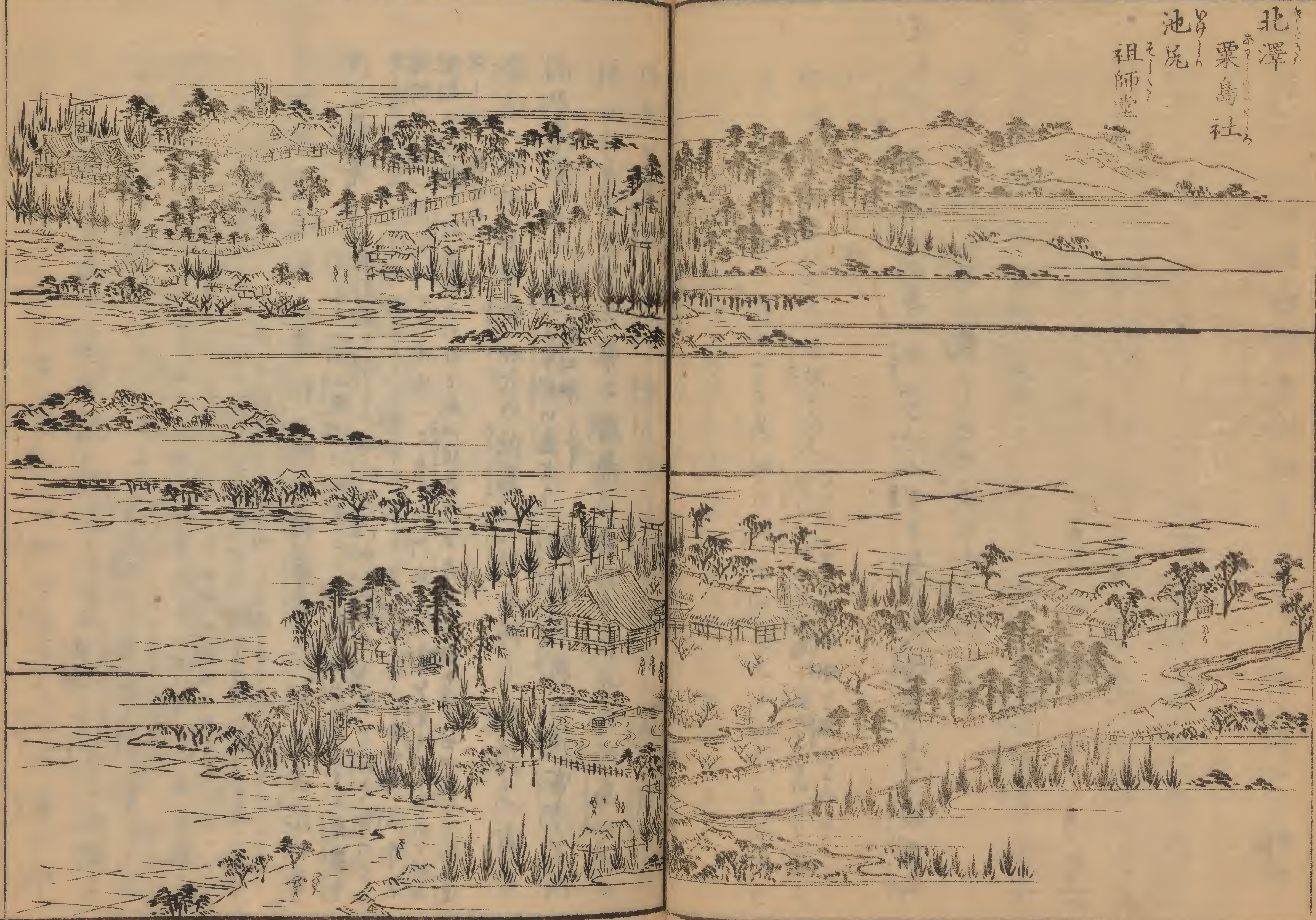
去我苦塚 別所臺と云地にあり塚の高サ一丈ばかりあり相傳ふ昔渋谷長者某此辺の人民を語らひ時として此塚の邊にて酒宴を催し歡樂せしにより苦を去の所謂なりと云 此辺都て古居館佛堂の類ありし地にや近頃道路を作らんとして畑を堀穿ちて土中布目の紋理ある古瓦瓶抔を得たりといふ

土器塚 駒場野の内なり里諺に云往古此地奥州街道なりしゆゑに源義家朝臣奥州征伐の頃此地に至りたまひ酒宴ありし土器を後土人等此地に埋めて義家朝臣の武功英名をそうす故ありしも土器塚と称すと云 其塚の側を同勢山と呼ふハ義家朝臣供奉の輩の居たりし旧跡といふ 按に此地に芦毛塚と称するものあり疑ふらくハ土器塚も驥塚を誤るものならんかし往古ハ馬などを埋めたる塚なるべし

足毛塚 宿山と小地名に称する地の里正金子氏構の内にあり頼朝卿秘蔵せられし芦毛馬の斃たるを埋蔵せし旧跡と云

氷川明神祠 駒場野官林より此方の岡にあり祭神素盞嗚命一座天正年間甲州郡内上の原といへる地にありしを加藤氏（加藤氏の祖ハ先の駒場野の条下に詳なり）此地に移り住する頃産土神なりければここに勧請なしまつるといへり祭礼ハ毎歳九月廿九日に執行せり 此神の氏子ハ古へより疱瘡の患ひなしといひ傳ふ

天満宮 同所駒場野道玄坂より一町半斗東の方にあり相傳ふ



北澤
粟島社
池尻
祖師堂

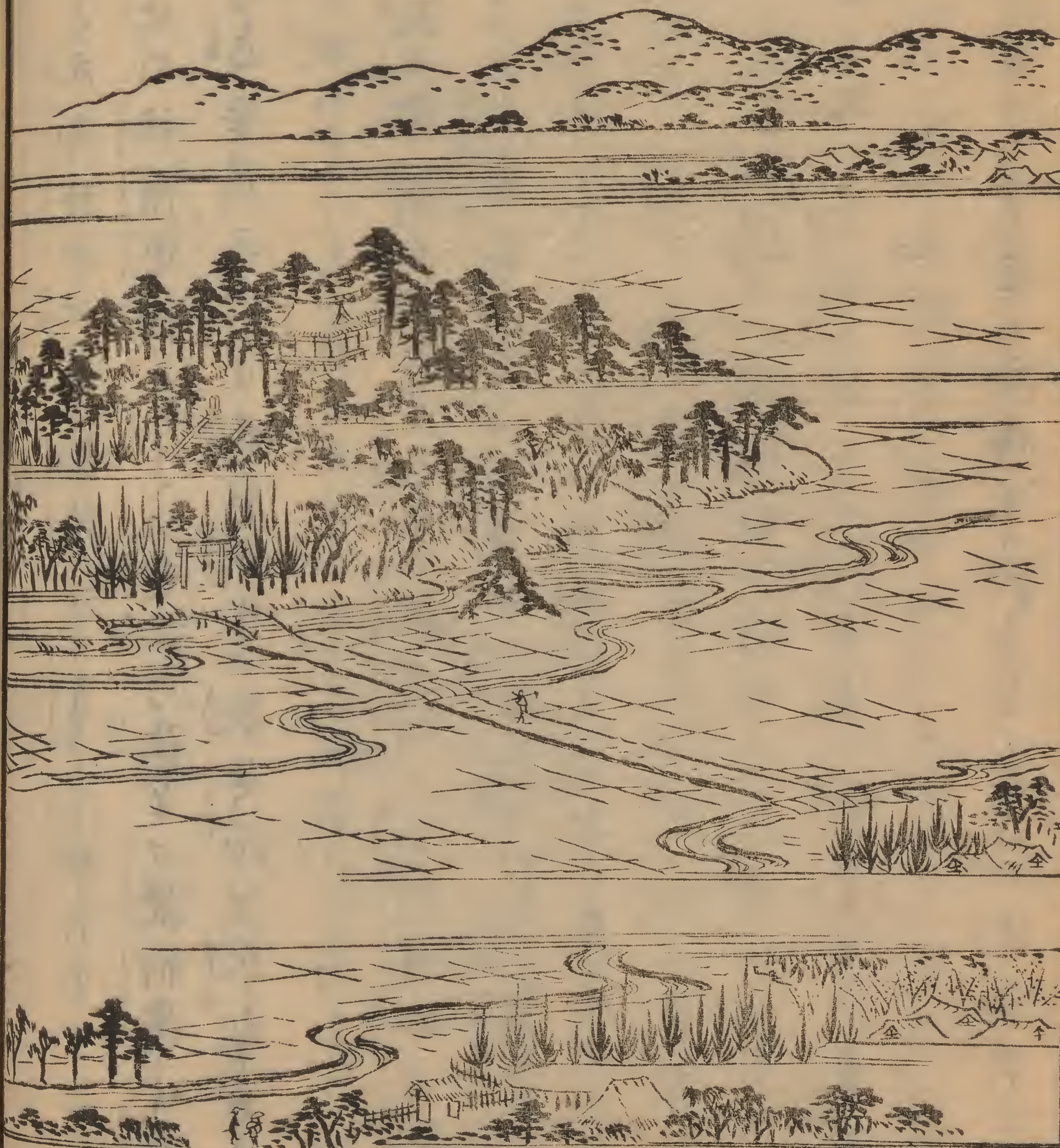
往古此地の農民市兵衛といふもの地を穿ちて小さき壺の中より印子の菅神の像を感得せりといふ　坐像一寸四五分とぞ　故に此地に宮居を営みて鎮守と崇むると云　昔の菅神の像ハ賊のために奪ハれしとて今一尺ばかりの石を以て造れる菅神の像を宮中に安置す　往古神躰を堀穿ちてより地ハ封して松を栽て験とす　其松ハ宮居より半丁斗西の方にあり　今中川氏の山中にある中に入と云

石剱　同し社地稲荷の小祠に収む　長二尺二寸斗　鐶本ふとく八九寸廻りなりて　往古菅神の灵像を感得せし時同し土中より得たりといひつたふ

北澤淡島明神社　北澤村八幡山森巖寺といへる浄土宗の寺院に勧請す　当寺ハ此地八幡宮の別当にして初ハ八幡山の号あり　又森巖寺の号と浄光院と称せしハ越州黄門秀康卿の法号を採りて寺の号とせしと云　清誉上人　其師萬世上人の遺命を奉し慶長十二年丁未四月当寺を開創し恵心僧都の作の座像一尺五寸の阿弥陀如来を本尊とし脇士観音勢至の両像ハ行基大士の作と云　此辺西瓜を産す上品とす　世田ヶ谷大丸の辺同し西と称せり

祭神ハ紀州名草郡加太の淡島明神に同し相伝ふ当寺開山清誉上人　紀州名草郡の産なり　故に産土神とす　修行成就の後当寺を開創せられしとき常に腰痛の患あり依年月淡島明神に祈願を籠め夢中に霊示ありしを以て灸治し終に積年の病痾を遁れたりしかハ其報賽として紀州加田淡島明神の神主に告て此御神を此地に勧請なし奉り法楽ありしと云　此故に累世の住僧連綿として此灸治の法を口授相伝し衆病悉除の為毎月三八の日是を施せり　依灸治を求むるもの華遠きを厭ハすして此地に至る者少からす　祭礼ハ三月十九日と云

除剱難日蓮大士堂　同所八町斗南の方池尻村二子街道の右側常光院といふ日蓮宗の寺に安置せり　此寺ハ日義上人の開基にして往古ハ碑文谷法華寺の南坊なりと云　日蓮大士の木像ハ文二寸二歩あり　相伝ふ文永八年辛未九月十二日相州龍口に於て大士誅に伏せんとせられし時刀尋段々壊の奇瑞あるを以終に北條時頼の赦免ありて誅を遁れ給ふ　同国依智に移り本間六郎左衛門重連か家に入給ふ　重連大士の化をうけて大士手刻の自像をこふて乞　依自ら此像を彫造ありて重連に附属せられけりしを後故ありて



當寺に安置せるところの靈驗照々たる故に指人常に絶す

正一位子明神社　二子街道下馬牽澤邑道より左の方耕田を隔て丘の上にあり別當ハ天台宗宿山村壽福寺より兼帶す

馬牽澤舊跡　同所子明神の前今田畑となれる地の旧名なり世に云ふ今ハ上目黒世田ヶ谷へ跨りて都て上中下と三に分れたる邑名となれり里諺に云文治年間頼朝卿奥州征伐の時渋谷八幡宮へ参籠あり其時荏原野より東條芦毛の馬を撰んで献せられんとし此地を牽れしかとしふしに顛たふれけり是を止られしとぞ或云頼朝卿御狩の時このところにて乗られし馬類に驚き誤て澤に陷入て死せり故に塚に築籠すといふ又八足毛塚の鄰又云頼朝卿の馬なりしハ芦毛なりしとて今も此地にて芦毛の馬を蓄ふすとなりをしもあやまつてこれを蓄ふるときハ必祟ありとて恐れつゝしめりとぞ下馬を照し合せて考ふべし

若宮八幡宮　上馬牽澤村二子街道より右の方三丁許入て小き森の中にあり駒留八幡宮と称す北條相模守時頼朝臣崇敬の靈像にして神躰ハ一寸五分許ありて左の手に弓を持し


馬牽澤の古事

また其像の背に木牌を建る其牌面に銘ある文左のごとし

經塚駒留八幡宮
最明寺時頼公守本尊
北條左近太郎入道成願
奉安鎮所徳治三戊申年十月廿三日

經筒は紫銅にして合せ目は鉄にて綴たるものとおぼしけれども打損して鉄の跡のみ存せり圍は五寸六分長五寸あり

右　後　同

敬白
八幡大菩薩御寳前
奉如法書寫六部妙法蓮華經
奉讀誦妙法蓮華經一千部
志者為身心大施主現世安穏
生善所親類安穏福壽増長
南無法界平等利益

紫銅にして圍は八寸あまり長五寸あまり二の經筒は共に天和年間當社修造の時經塚といへる地より當社の神躰と共に穿得たりとあり

徳治三年戊申十月廿三日
左近太郎入道成願
沙弥見佛

按に皇朝年代略記皇代記如是院年代記等に徳治三年戊申十月九日延慶と改元ありしと將軍執權次第には十一月廿五日

經営落成の日新に法華經六部を書寫して銅壺に収め社の礎下に埋蔵し駿州建穂寺の僧隆範をして遷宮の式を執行せしむるとのみ

八幡山宗圓禅寺　同所二子街道の左品川上水の端にあり當寺ハ若宮八幡の別當寺なり洞家の禅院にして江戸駒込の大圓寺に屬せり本尊ハ座像の釋迦如来を安置せり當寺ハ北条左近太郎入道成願の開創にして存應林可和尚中興たり北条左近太郎入道成願靈牌

文保元丁巳年十月廿三日寂
當寺開基　心覺宗圓菴主
北條家孫左近太郎入道成願

長立山常光寺　弦巻村世田谷上宿の南にあり日蓮宗身延の末にして天正十三年乙酉八月草創せり開基ハ越後人泉蔵院日禮と号す日禮ハ朶雲の頃此地青山氏の家にある此人嗣なかりしを

愁ふ日禮妙経秘呪の奇特をあらはし一子を出生せしむ故に此人宗教をあらため日禮に帰依し更に精舎を創立し日禮を開山祖とし弟子の礼を儀く 清山氏後日林と号せ當寺の第二世なり

本尊釈迦如来額は如松の二字やしなく廣澤の筆なり 石水盤は喜多見家寄附する所なり又浅野内匠頭長矩の寄附の三方あり 黒漆を以て塗松に雀の描畫あり此器は馬牽澤大徳寺にあり ことくく彼家の寄附なりしか後に人にへ分散せりといふ

常盤橋 二子街道中馬牽澤村世田ヶ谷入口三軒茶屋の往還角のかたより向へ三丁斗入て小溝に渡せる石橋を云 名付らく里諺に云く昔吉良頼康の妾常盤といへる婦人不義の事ありて此所に害せらる然に其霊里人に崇を依其灵を弁天に崇め其腹に出生の男子を若宮八幡と崇まるとのよ何れもと上馬牽澤村にあり此常盤といへる女は大平出羽守が女なり世田ヶ谷紀行にくはしくのせ

按に此わたりより二十歩ばかり東の方道より北側に松を植たる塚あり是を常盤の墓と云上に不動の石像あり又同じ南の方にも塚あり是なりともいふいづれか実ならん

大渓山豪徳禅寺 常盤橋より五丁計西の方にあり曹洞派の禅刹にして江戸高輪の泉岳寺に属す當寺は文明年間吉良家創建の精舎にして旧は弘徳庵と号す其頃は済家なりしを馬堂昌誉禅師開山祖とす 其後門庵宗関禅師今のごとく曹洞派に改む 中興の開基は井伊掃部頭直孝侯同中興開山は天極秀道和尚なり

佛殿 本尊釈迦弥勒弥陀等の三世佛の木像を安置す

額 佛殿の二重家根の軒に掲る所の筆なり

選佛場

選佛場 佛殿の右に對ふ當寺十勝の一なり額は二重家根の軒に掲く當寺十五世霊潭の筆なり

弐丘佛

石燈籠 佛殿前左右に立り延宝五年井伊家掃雲院殿の寄附なり

臥龍櫻 佛殿の前右の方にあり當寺十勝の一にして往古吉良政忠園中にありしと云其の老樹やしなく單瓣白花なり

洪鐘 佛殿の前左の方にあり旧鐘の銘は寛文十二年鐵牛和尚の製文にして自ら校摘すまでなり今存するものは延宝七年中興天極秀道和尚の銘にて[illegible]


世田谷
豪徳寺
○印 當寺十勝
本堂

世田谷八幡社



照心堂 客殿の左林叢の中にあり當寺十勝の一員なり

吉良氏古塋 照心堂の前卵塔の中大なる松樹の下にあり古き五輪の石塔並び立てり一ハ世田谷御所吉良右京大夫政忠朝臣の墓なり當寺過去帳に前の開基洞春院殿照岳道旭居士文亀二年壬戌六月十七日卒とあり又一ハ政忠の伯母弘德院殿久栄理椿大姉の墓なり弘德院ハ當寺過去帳に文明十二年庚子十二月二日逝とあり

古石燈篭一基 同し墓の前にあり政忠庭中のそのありと云世に云地藏形これなり

當寺開基碑 佛殿の西に立る寛政十一年の冬當寺十五世靈潭和尚の撰文にして往古吉良家に因ある者力を戮せて靈潭和尚の志を補助しこれを立るといふ

碧雲関 總門の名なりこれも當寺十勝の一なり其余黄鳥嘯ハ同し門の左の叢林の中にある所の梅樹を云松柏壇も又同し方の樹林を名く楓樹林も同し奥にありて晩秋の紅錦賞すへし

清涼橋 總門の前の小川に架せる橋の名なりこれも十勝の一なり

當寺ハ文明年間或云十二年庚子世田谷御所吉良右京大夫政忠其先吉良治部大輔治家上野國飽間の地にありしに基氏より此世田谷郷を賜り初てここに移住せしより後世田谷殿と称せり伯母弘德院殿久栄理椿大姉のために創建せる所の精舎なり過去帳に文明十二年庚子十二月二日とあり直に其法号を採て弘德庵と号け昌誉禅師を請して開山

祖とす（其始ハ済家の禅刹なり）天正年間に至て宗関禅師来て薫席し洞門になしむ万治年間江州彦根城主正四位上左中将井伊直孝侯此世田谷の地を賜ふ（或寛永十年癸酉にあふとも）万治二年己亥六月廿八日逝す（法号久昌院殿豪徳天英大居士と号す）遺言によりて令嗣直澄其遺骸を當寺に葬す故に弘徳を豪徳に更む（弘豪同音）爾後直孝侯の賢娘掃雲院殿無染了心禅尼先考の冥福を弔ひむかため許多の浄資を喜捨して堂宇を経営し三世佛の木像を安置して良田数十頃を寄らるゝとなり

吉良氏古城跡

豪徳寺構の内右の方に續る地を云（今ハ井伊家の林と号れり）堤の形二重に残り空堀の跡とみゆる所もあり其封内一町四方にして櫓を構へたりしと覚しき跡三ヶ所迄存せり又居館の跡と称せるもの築地或ハ林泉の形残りて水を湛へたる地なともあり冨士見松とよへる老樹あり其地より斜に芙蓉の峯を眺望せり

旧ハ同し所に御所櫻と称せしものありしか後世枯かれしと云て今ハ此樹なし（世田谷の吉良家ハ清和天皇十世の苗胤足利左馬頭義氏に二子あり嫡男を義継と名け次男を長氏と名く長氏三州に居るこれを三州の吉良と称し義継ハ奥州に居る故に奥州の吉良と称も是則吉良姓の祖なり義継六傳を吉良治部大輔治家と号く治家始武州世田谷城に住す時の人世田谷御所と称し又六傳を吉良政忠と称す法号を洞春院といふ其後頼久の世に至て吉良家ハ三州東城西城の外称号ハへからず宜く蒔田に改むへき旨台命ありけり蒔田と号く則久良郡の蒔田村に住ありたるに在名をもちゆると云小田原北条家関東を領せられし頃ハ其縁あるを以て許多の地を領せしよし云伝ふ然れとも其貫高詳ならず今世田谷領と称せし村数五十七箇村あり其頃一圓所領なりし歟）

宮坂八幡宮

同し寺より西の方北岡續にありて其間三町計を隔つ鎌倉鶴岡八幡宮の摸を移して勧請の年暦詳ならす凡天文十五年吉良頼貞當社を建立すと云（或ハ義家朝臣勧請せられし御神を中して吉良家再興とも云伝ふれとも義家勧請と云ものを疑ふらくハ非なり）祭礼ハ八月十五日にして社司大場氏の奉祀しける社内に存する北櫻ハ頼貞親植らるゝと云伝ふ（按るに頼定と云ハ頼康のあやまりなるへし當社建立の棟札に注せる所の頼貞の花押と等々力村大平某所蔵の頼康の古文書に印せる所の花押尤同し然時ハ頼貞ハ頼康の始の名なるへくありしならんと思はし）

當社梁牌一枚 当社に蔵す其文左のごとし

天文十五丙午八月廿日立柱 同十二月十六日上棟 同廿日卯癸 御遷供養道師 鶴岡相承院法印大和尚位快元 □□□□□□□□
同等覚院権律師□□
當社八幡宮新建立大檀那源朝臣頼貞（花押） 鍛冶奉行鈴木藤十郎有宗 同松原藤六貞 大工青木右馬助安重 熊澤入道々珎
于時惣奉行江戸摂津守法名浄仙 大工奉行石渡戸新兵衛常久 惣大工番匠山井大蔵丞 西村左近将監吉重 番匠由木内匠助 鶴岡承仕法橋丸圓 法橋丸喜

延命山勝光禅院 豪德寺の前の道を隔てゝ向ふにあり洞家の禅刹にして八王子安下の心源院に属せり本尊は虚空蔵菩薩にして座像二尺計あり 作者知らず 建武二年乙亥世田谷御所吉良兵部大輔源頼氏開創の精舎にして往古は済家の禅宗にて龍鳳寺と号す 豪德寺所蔵吉良系図に左京大夫とあり又当寺に相伝ふ頼氏法号は興善寺殿月山清公と号す故に始め当寺を興善山と号すと云ひ世田谷私記にはその子興善寺を治氏の法号とし又豪德寺吉良系図の中に政忠の二男文貞と云人の名の下に禅興寺ともありて諸説紛々其実を得がたし 鎌倉建長寺の吟峯龍公禅師開山たり 文和三年甲午五月七日に寂せり 其後天文十五年丙午世田谷吉良家六世の孫左兵衛佐源頼康 豪德寺吉良系図に正三位武衛と云 法号は說山浄森居士とあり 中興開基たり然に天正元年癸酉同吉良家七嗣の孫左兵衛佐従四位下源氏朝 豪德寺所蔵吉良系図に左兵衛督とし法号を寛相院殿と号し弦巻の實相院を建つ あるひは 当寺の号を勝光院とあらたむ又天永琳達和尚 琳達和尚は弦巻の實相院の住持なり を請じて当寺に今の如く曹洞派の寺院となせり 当寺過去帳に延命院殿大居士と云法名を載す 居らしむ 当寺の山号此号よりおこるならん 然れども此延命院没卒の年号忌日をあらはさゞれば又何人なるを知らず 按に世田谷私記とのへるものに延命院は吉良の庶家なりとあり 庶家は奥州の吉良家にして又太郎と号せし人なり

愛縁薬師如来 丈二尺斗木像運慶の作なりと云 相伝ふ往古北条氏康卿の息女崎君常に此霊像を崇信し天文六年の春世田谷御所頼康卿の室となれりし 此尊像の霊示により 蒔田の地およそ三千石を 終に永禄元年世田谷御所頼康卿の室となれりし縁起にみえたりといへども中興の其初めの事にして尤拙文ことに疑はしきことども少からねば故に其文を略してこゝに記さず
按に崎君は氏綱の女にして氏康にはいもうとなり

廣戸備後又三郎正之碑 當寺佛殿の右にあり正之ハ駿州の産にして二階堂山城三郎行村十三世孫其先ハ京都柳営社稷の臣なり高祖五郎久行江州廣戸ノ郷を管領するに因て氏とす永禄十二年己巳召に應して御當家に仕まつり後仕を致して世田谷の地に退居し慶長十七年壬子七月十日行年八十八歳にして終る依て當寺に葬むるのち延宝八年の冬孝孫行隆正武正次等これを立るよし銘せり

吉良氏古塋 堂前左の方にあり頼康の古墳も當寺にありしといへども定かならず又蒔田の勝國寺にあるを信ずるともいふ與善寺の墓塔も並ひてあり

鶴松山實相院 登戸通道世田谷元宿の左の裏通弦巻村にあり曹洞派の禅林にして同所勝光院に属せり當寺ハ世田谷の吉良家七世孫左兵衛佐氏朝閑居の旧跡にして其閑居の号を学翁斎と称せしと云学翁斎卒去の後 学翁斎ハ慶長八年癸卯九月六日卒すとあり 其息頼久當寺を開創ありて法号實相院殿学翁玄誉大居士の文字を採りて寺号に用ひ天永琳達和尚を開山とせり 或ハ應天和尚ともいふ 本尊阿弥陀如来作詳ならず

学翁斎の墓碑境内にあり又當山開闢鶴松院殿快窓壽溪大姉と称する石塔並ひ立り 鶴松院何人なるをしらず 可尋 氏朝ハ吉良左兵衛佐頼康の養子にして今川の一族堀越治部少輔貞基の次男なり駿州瀬名陸奥守一秀の弟なりといふ

弦巻郷 世田谷にあり此地ハ昔柔原右京進といへる人の所領なりし由永禄二年小田原北条家の所領役帳にみえたりとぞ

世田谷八幡宮 同所にあり相傳ふ八幡太郎義家朝臣の勧請なりといへり則此地の産土神にして祭礼ハ八月十五日なりとぞ

龍華山永安寺 長壽院と号す天台宗にして東叡山に属せり本尊ハ千手観音ハ恵心僧都の作なりといふ開山ハ清仙上人 俗姓ハ二階堂氏なり 開基ハ鎌倉公方源氏満朝臣なり中興開山ハ秉海法印 俗姓石井氏なり 同中興開基ハ石井内匠兼雄法名を良賢居士と号す

龍華樹 堂前櫻樹を号く今ハ枯てり當寺の開山清仙上人鎌倉大蔵谷永安寺の旧地より遷し栽へうりとなり當寺を竜華山と号するも此樹によるとあり永安寺の旧跡ハ鎌倉大蔵谷瑞泉寺の門外右の谷を云往古永安寺ハ源氏満朝臣の菩提所なりしと云

石井氏移塋碑 本堂北の側にあり

相傳鎌倉公方氏満朝臣 左馬頭基氏子なり 應永五年十一月四日逝去

あり永安寺殿壁山全公と号す仍鎌倉の大蔵谷に新に一精
舎を造り直に其法号を採て永安寺と号し建長寺の曇芳
和尚を請して寺主たらしむ（諱周應夢窓國師の法嗣なり夫より後建長寺瑞林菴の開祖なり）
満兼朝臣持氏朝臣相継て重修ありしに永享十一年二月十日
持氏朝臣此寺に於て自害せられしは（管領上杉憲実の所為なり）其男成氏
公（永壽王殿と云）幼稚なるに依て暫く難を美濃國に避らる然に嘉吉
元年京都将軍の命を奉して再び鎌倉に帰入しありといへとも
上杉の両執事良もすれは上を蔑し権柄を争ひ闘諍遂に止
時なく享徳四年六月十六日今川上總介か為に鎌倉を追補せらる
當社宮殿民居に至る迄悉く灰燼となり永安寺も又廢墟と成
あるに於て足利六世の繁昌一時に滅し都會空しく草莽の
地となりけり爰に二階堂信濃守なる者あり持氏朝臣に仕へて
永享の乱に永壽公の近臣悉く永安寺にて死す

信濃守一人公の遺命ある事あるを以て倶に死する事を免さ
れすして遺る其後裔孫名は某法名清仙と云者あり永安寺を
鎌倉幕府世々の墳壟安鎮の地たりしに荒亡年久しく兵馬馳
走の巷となる事を患へとし終に再復の願を發し延徳二年三月
勝長壽院の門主（寺記に持氏公の季子とのみ記して其諱を注さす）の命を奉して此武州
中丸郷大蔵村は其名鎌倉の旧地に同しきを以て因拠として禅刹
一宇を建立し鎌倉幕府世々の神主を安置し寺号をも又永
安寺と称す門主某の功を挙て長壽院と云（當寺の開山なり）天正年間
當寺第六世良深より以後台密の二教に改て堂宇を修補す
然とも世々の兵燹の為に草堂のみなりしを明暦の頃石井兼忠と
いへる人其父良賢居士の没後追福の為に堂塔を重修し佛殿を
荘厳す是中興開基なり
不動明王画幅（妙澤華聖護院道興准后開眼せられしと云傳ふ即紙中に華押を注してあり）

妙澤和尚ハ嘉慶の頃の人にして足利三代義満公の時世に當れり大草紙に妙澤ハ夢窓國師の法嗣にして不動明王の化身なり児の時より好みて不動明王の尊像を画き（本朝画史云毎日一幅を画き敢て怠らず霊験甚多しと云々）奇特をあらハせしつゝ挙けられ十八年道興准后東奥下向の時其門徒なりし松井坊に宿しおひられ其眼ありしとて即紙中に花押をおかされしを後石井氏の家に傳へしを兼重とよふ人の時當寺に附与せしと云

岡本半助裁許状一通　武蔵七黨系圖　古写本なり

氷川明神社　大蔵村にあり永安寺別當奉祀せり祭神五座大巳貴尊素盞嗚尊奇稲田姫手摩乳脚摩乳等なり祭礼ハ毎年九月廿一日なり相傳ふ暦仁元年（九月九日遷宮同廿一日始て祭祀を修ふといふ）當地の主江戸氏（此江戸氏ハ桓武平氏の裔良文の流畠山の一族にして北見氏の祖也）足立郡大宮の御神を勧請ましらく云旧き唯一宗源の社なりしに其後二百有餘年を経て天文年間松井坊とよる山伏奉祀の宮となり両部習合とす（此松井坊ハ武州都筑郡の人にして大田道真の臣なり依て道真崇信せし処の十一面観音の像を傳来しこゝに當社の別當に補せるの後氷川明神の本地佛となしまつるとそ）或云永禄の頃迄ハ松井坊奉祀たりしに後田中三河守といへる人當社背ハ五所に並び建て宮居麁く神職となり再ひ唯一とせしと云しかれとも其頃よりまた荒廃しく唯此一社のみ残れりと云（其の燈籠に札に載て氷川明神第四宮とあるによりてあるへし）然に明暦年間永安寺第九世辨栄法印別當に補せられしより再ひ習合の社となし神躰及ひ本地佛等を新に安置せられたりとあり背の神躰ハ江戸氏の兜の立物にして黄金の瓶子に畠山重忠と銘しあるよしとなりされとも元禄の頃より失ひけりとて今ハなしといふ

棟札一枚　當地石井氏の家に傳ふ按に棟札に神主田中松井坊敬白とありあるいハ田中と松井坊別人にあらずして田中ハ松井坊の俗姓にてありしか

面

哀愍衆生者　永禄八年乙丑正月十九日

武蔵國荏原郡（石井土郷）大蔵村氷川大明神第四ノ宮

我等今敬禮　神主田中松井坊敬白云々

裏

再建副願主清水源兵衛　長島源太郎　石井玄蕃　伊丹孫次郎　河野大學

大旦那　石井内匠助平兼實敬白云々

武運長久　庄屋

大野新兵衛　大工石渡

帯刀先生義賢之墓　大蔵村石井土の内殿山といふ地の東南北見村の境に之　農家清水氏の宅地の傍にあり　清水氏ハ清水冠者義高の後裔なりと云先に挙る氷川宮の棟札の中に清水源兵衛とあるハ則この清水氏の先祖なりとぞ　土人ハ大将塚と呼へり

東鑑曰　治承四年庚子九月七日丙辰源氏木曽冠者義仲者帯刀先生義賢二男也義賢去久寿二年八月於武蔵国大倉館為鎌倉悪源太義平主被討亡于時義仲為三歳嬰児也乳母夫中三権守兼遠懐之遁于信濃国令養育之云々

相伝此地ハ義賢居館の旧址なりし故に殿山の称ありといへり　天明年間此地の農民清水氏義賢の塚をあばきしに石壁の中に古刀及び砂金の類を存せしとありされと祟あらんを恐れ旧のことく埋蔵しけるとぞ　其後大永年間石井氏某法名良覚と云し人京都より此殿山の地に移り住せ　土人云く同所新坂の上神明宮の祠に大六天の宮あり此良覚の霊を祭ると云　或ハ伊田中務大輔兼紀と云人の居跡なりといへり　按に石井家の先祖良覚ハ武州久良岐郡釜利谷の伊丹氏より出て小田原に属し[illegible]　されと中務大輔兼紀と名乗る事其家にも所伝なしとぞ後世土人の傳へ誤るにやあらん又先に挙る氷川明神の棟札に石井内匠助兼實とあるハ良覚の子にして其子孫今猶連綿たり

大神宮祠　殿山の中にあり永安寺より別当兼帯す神木ハ至ての老松にして土人乳垂の松と号す

石井神社　弦巻村より西南の方大蔵村石井氏某か地にあり　大蔵邑古荏原郡に属す明暦より己降多磨郡に入たり　祭神詳ならす　寛永年間石井氏兼忠社を旧地石井土谷と云より今の地へ移し奉り稲荷を相殿に合祭せり又近世故ありて同兼昌磐井と斎の仮名ハ違へとも其訓の相似たるを以て斎稲荷とも称せりとなり　土人云当社ハ武蔵国荏原郡二座の内延喜式神名帳に載らるる磐井神社是なりと　石の文字古事記日本紀等に伊斯或ハ伊波ともありて一字二訓なり土人云磐の文字ハ筆画多くしてまぎらはしきか故に其便ならさるを厭ひて石の文字に改めたりとの事地名の文字改めかゆる例その例多し　舊地ハ今の社より七八町を隔て同邑石井土谷にありて其地に甘泉あり武蔵国風土記残編に所謂荏原郡磐井神社の辺磐井ありと記されたるは則此霊泉なりと



氷川明神社（ひかはみやうじんのやしろ）
祷善寺（とうぜんじ）
慶元寺（けいげんじ）

云云相傳ふ往古鎌倉右大將家の幕下安達藤九郎盛長の孫同出羽守景盛の次男石井石見守兼周その子同左衛門尉兼章仁治元年庚子執權武藏守經時の吹挙により始て武州石井郷を賜りて此地に移り住を石井郷も明暦の頃大藏邑と共に多摩郡の内に加へられ今ハ大藏邑に属しゝ小名となれり今石井神社の旧地を石井土谷といふも古の称をうしなハざるの證なり此地古き御図帳あるひハ古碑の類ひなも荏原大藏邑とあるを證とすへし又等々力満願寺古文書の中に弘治二年丙辰十二月十八日吉良左兵衛佐頼康より與へし所の文に大藏村年貢四十貫皆納石井戸新開二貫満願寺へ一貫分と云々故に石井を以て氏とし則當社を崇しまり石井氏累世鎮護の神とすといふ按に荏原郡不入斗村に鎮座ましませる鈴の森八幡宮を以て社司等ハ式内磐井神社と称し又石川中納言豊人卿武藏守に任し荏原郡に在せし頃靈示によりて經始せし宮社なりと云傳ふ按に續日本紀に延暦七年二月中宮太夫從四位上石川朝臣豊人を兼武藏守とも同年七月大藏の郷とすと云く然に國の守ハ上古ハ府中に在せしかバ旧史にいふ當国の府ハ古多摩郡にあり大藏村ハ其頃荏原郡に属せしといへとも多摩郡に接しあれハ府中も遠からず恐らくハ豊人卿此地に在してより後世大藏の号あるならん又武藏国風土記残編荏原郡磐井神社の條下に社辺に磐井ありと云是なり然るに當社の旧地石井土谷も今ハ多摩郡に加へられたれとも昔ハ荏原郡なり其旧地[illegible]八幡宮の条下を照合せてしるへし

東覺山吉祥院 地藏寺と号し大藏邑の南鎌田村にあり天平十二年庚辰行基大士開創を新義の真言宗にして小杉の西明寺に属せり

本堂 本尊地藏菩薩 立像丈長一尺七寸 行基大士の彫像なり

不動尊 同堂内に安置せり良弁僧都の作なりとそ刑部丞源義光祈願所の本尊なりといへり

印子歡喜天 弘法大師の作鎌倉副元帥平泰時祈禱の本尊なりといふ 七観音画影 興教大師の筆なりといふ往古當寺盛なりし頃ハ仁和寺に属せしなり久安四年己辰覚法親王兵乱をさけて此地に下りあひ同年仲夏の頃より初秋に至る迄當寺に宿せられし頃の寄附ありしとあり

日輪弘法大師画影 嵯峨帝八宗論の御影なり同大師の真筆にて是も仁和寺宮の寄附なりといへとも

縁起曰天平十二年庚辰行基大士勅をうけて諸國に伽藍を造立したまふより其頃當國に至りたまふ然るに此地に齢六十えかりし貧女住す幼より地藏尊を信し常にて称名怠らすしても止時なくて供養しまゐらする彼貧女一日行基菩薩の御許に到りて

未来成佛の道を問ふまる同十三年辛巳正月廿四日 行基菩薩
此地に至りたまひ地蔵尊の像を彫刻ありてこれを貧女に与て
曰く此地ハ則ち尊き有縁の霊地なり汝直に精舎を営むへし 吾
其勝地をトすへしとて拄杖を以て地上に畫して是を定めて 今此地を花屋
敷と云ハ其旧跡なりとぞ 依て貧女ハ 其頃世に地蔵尼と字せしとなり 雜染して寺院建立の大志を
企つるに同郷の冨民秦氏某なる人糧財を喜捨し田園致附し
これハ精舎僧坊悉く落成し称名散花梵唄の声絶ることなかり
しに然るに建武二年の兵乱に堂宇悉く灰燼となりしより已降
わつかなる仮に草堂に安しまつりしに遙の後世田谷の吉良氏不
測の靈夢を蒙りて大に崇敬ありて寺院再興ありしかと竟に
天正の頃小田原北条家没落の後ハ吉良氏の家も共に亡ひたり
しかハ其後ハ漸香花の備もおろそかになりて今ハ僅に草堂
一宇を存するのミ 雖古堂舎兵火の為に灰燼せし頃も本尊ハ自ら火焔を遁れ[illegible]

安産を祈りまゐらせしに奇瑞ありしかハ報恩の為永世當寺の檀那となり其頃田園等を喜捨しまゐらせ

観音寺

吉祥院より八町ばかり西の方宇奈根村にあり當寺ハ
永正年間天台の沙門實海 河越喜多院第十四世なり天正五年八月十七日化寂す 創建する所の
寺院にして深大寺に屬せり本尊十一面觀音の木像ハ傳教大師
の作なり故に寺号とせりといふ 昔ハ相州小田原にありて圓正寺と号しが兵火に亡ひしかバ炎上の砌あるをつゝひて寺号を更るといふ

荒井對馬治義墓 當寺にあり相傳ふ治義天文中上野國新田より移て小田原の北条家に仕へ後此地に遁れて民間に交り天正元年癸酉二月十七日没する由碑面にしるせり此地に荒井氏の子孫今に連綿として相續するものハ此由なり

永劫山慶元寺 華林院と号観音寺より七町あまり西の方喜多
見村にあり浄業の精舎にして木机の泉谷寺に屬す
本尊阿弥陀如来の座像ハ一尺計ありて恵心僧都の作なりと
云開山ハ真蓮社空誉上人と号せり當寺ハ江戸遠江守の後裔
江戸刑部少輔頼忠の子を江戸攝津守朝忠といへり此人も頼忠に同しく小田原に
屬せり頼忠の次男勝重と云 始勝忠より江戸氏を改て其采邑喜多見の地名を以て氏

とし喜多見若狭守勝重とよべり小田原没落の後遊客となり御當家に屬し奉る
然に江戸ハ御當家の御居城の地なるを以て氏を改むといふ勝重の二男喜多見
五郎左衛門重恒其子若狭守
重政より後其家滅す 喜多見氏建立の寺院なりといふ

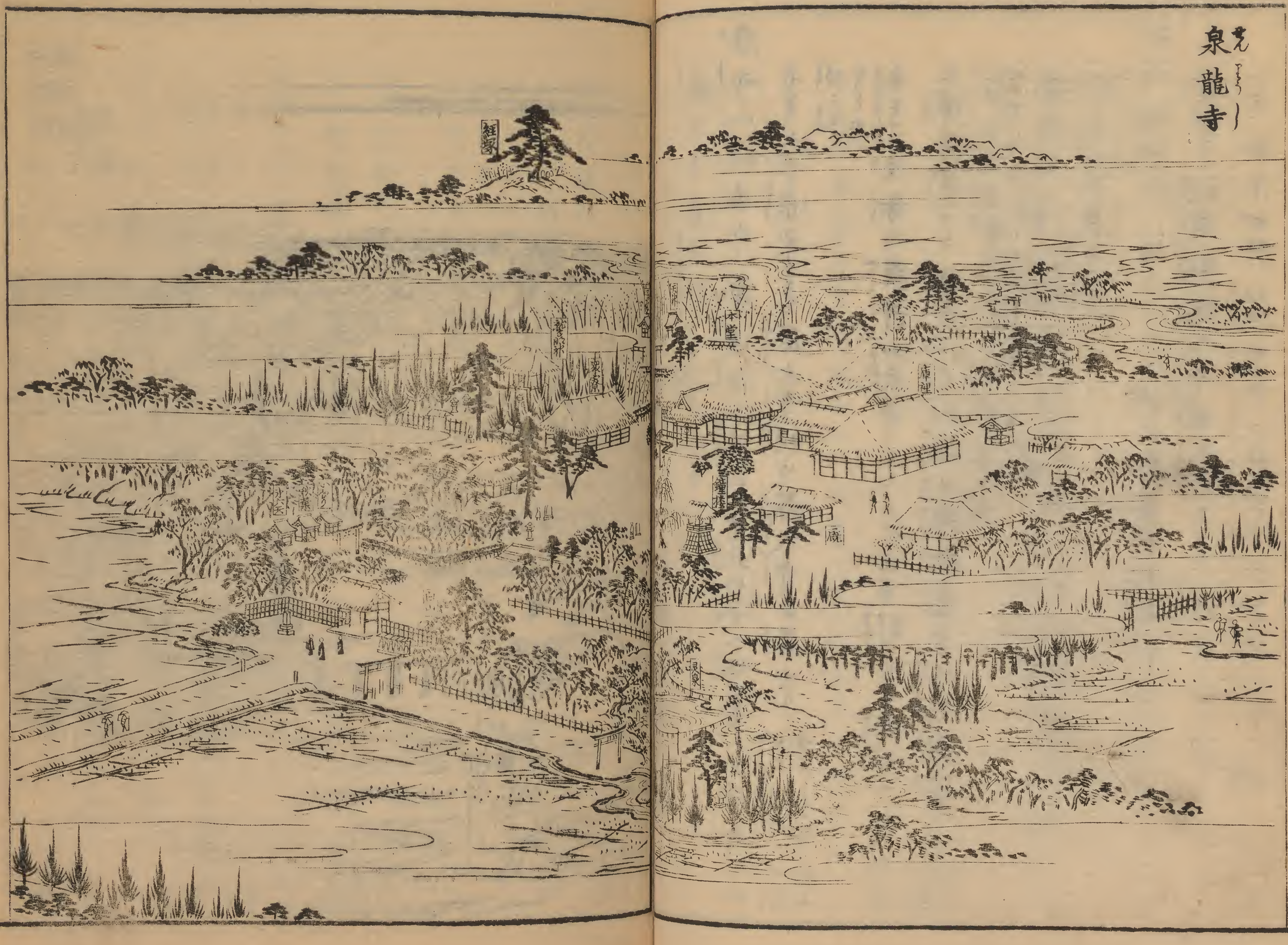
天神森 慶元寺の前小高き岡にあり 北見氏陣屋の跡なりと云 歌枕天神と号く
寄祀の来由 天王を相殿とせり 相傳往古澤庵和尚堺南宗寺に
ありし頃 勧請せられしを承應年間喜多見久太夫重勝大坂にありし
頃神木の梅樹と共にこの地に移し自の園中に勧請し天神
森其旧跡なりと云 神影ハ画像にして古土佐の筆と云 後故
ありて此地石井兼重の家に傳へ梅樹も又自庭前に迂したり
しか後兼重の子通兼と云人大蔵村の永安寺に安置せしも
なるを故に永安寺にも神木の若木あるも

除蝮蛇神符 北見村の内宿といへる地に住る農家斉藤伊右衛門
某が家に傳ふ毎歳四月八日に此神符を諸人に与ふ蝮蛇に
齧れし人此家に至れハ禁咒を乞へハ忽ちに其痛を去毒を消
す事甚奇なるも其神符ハ永禄二年未九月廿日斉藤道善
藤原忠嘉再改之と注したるも

普命山禱善寺 華蔵院と号す同所北の方へ廻る事三町餘にして
あり天台宗にして深大寺村の深大寺に属せり 氷川明神の別当寺なりし昔ハ宮本坊と号すなりと云
本尊ハ座像の薬師如来にして二尺五寸計あり脇士に十二神将
の像を置り往古江戸刑部少輔頼忠を以大檀那とし 此頼忠ハ江戸太郎重長より五代の孫江戸彦次郎常光の子にして小田原北条家に属す

薬師堂 本堂の前左の方にあり立像一尺八寸計の木像にして作者知らず 宿願ある者の其家へ迂しまゐらせ通宵法施供養なしける故に道俗宿薬師と称しまゐらするといふ

氷川明神社 同所の左に並ぶ禱善寺別当奉祀を祭礼ハ九月十
八日なり 相傳勧請の年歴久遠にして詳ならずといへども永禄十
三年庚午四月江戸刑部少輔頼忠社を建立せし頃の棟牌


泉龍寺
本堂
鐘楼
庫裡



一枚當社ニ存す　寛永二年乙丑五月江戸氏の遠裔喜多見勝重當社を重建せしとなり

梁牌銘曰　　別當宮本房　　代官　香取新兵衛

聖主天中天　加陵頻伽聲
奉再造氷川明神社頭一宇天道納受依
哀愍衆生者我等今敬禮
大檀那江戸川部少輔頼忠　　大工石渡
鍛冶正吉

同背面曰

于時永祿十三庚午歳卯月二十七日

武州下多東郡中丸江喜多見村

石華表　左右石柱ニ承應三年甲午九月喜多見氏久太夫重勝同五郎左衛門重恒等建立せらるよし鐫付てあり

馬頭觀音堂　華表の右の方にあり喜多見重勝の乗馬の斃れしを埋蔵し觀音ニ崇むるといふ

江戸遠江守旧館地　氷川明神の社地より一丁計巽の方ニ小篠の猥雑たるを名つく今ハ除地とす延文三年十月十日

竹澤右京亮と共に謀て矢口の渡にして新田左兵衛佐義興を亡したりし江戸遠江守是なりと　其子ハ弟二郎矢口明神の條下に詳なりと

雲松山泉龍寺　氷川明神より八町ばかりを隔て西北の方和泉村にあり曹洞派の禅刹にして相州高座の宝泉寺に属せり本尊釈迦如来の坐像ハ八寸計ありて脇士ハ阿難迦葉なり像を置くあり　丈七寸　脇壇に聖観音の像を安置せし良弁僧都の作なりと云当寺ハ良弁僧都の草創にして往古ハ法相華厳を兼て大伽藍なりしとなり中興を銕叟瑞牛和尚と号し相伝ふ孝謙天皇の御宇天下大に旱魃す依て良弁僧都請雨の法を修せられしに奇特ありて清泉湧出せと云即門外南の方に有る霊泉是なり　此地を和泉邑と名付くるも此清泉によるゆゑなりとぞ又小田原北条家の分限帳に川村某の所領に江戸泉村七貫文とあるも此地をいへるなるべし

霊泉　惣門に到りて右の方にあり槻の樹の根より湧出して沸くるも此池水つくる旱魃にも枯るる事なく此近里悉く耕田の用水にすといへり寺号も此霊泉に依て名付とぞきこえし

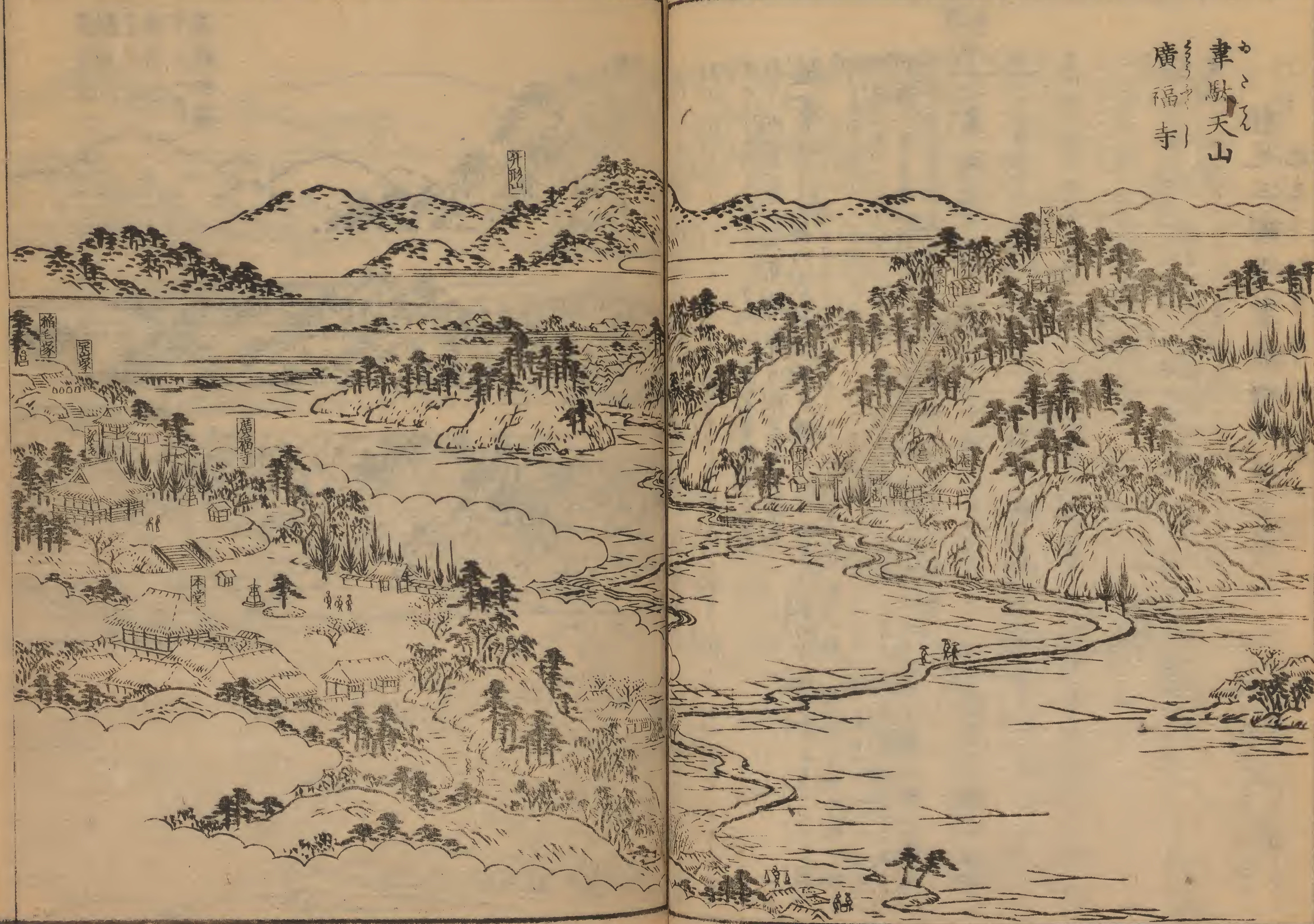
池の中島に蛇形の弁天の像を安せし宮居あり此霊像ハ良弁僧都の作なりといふ

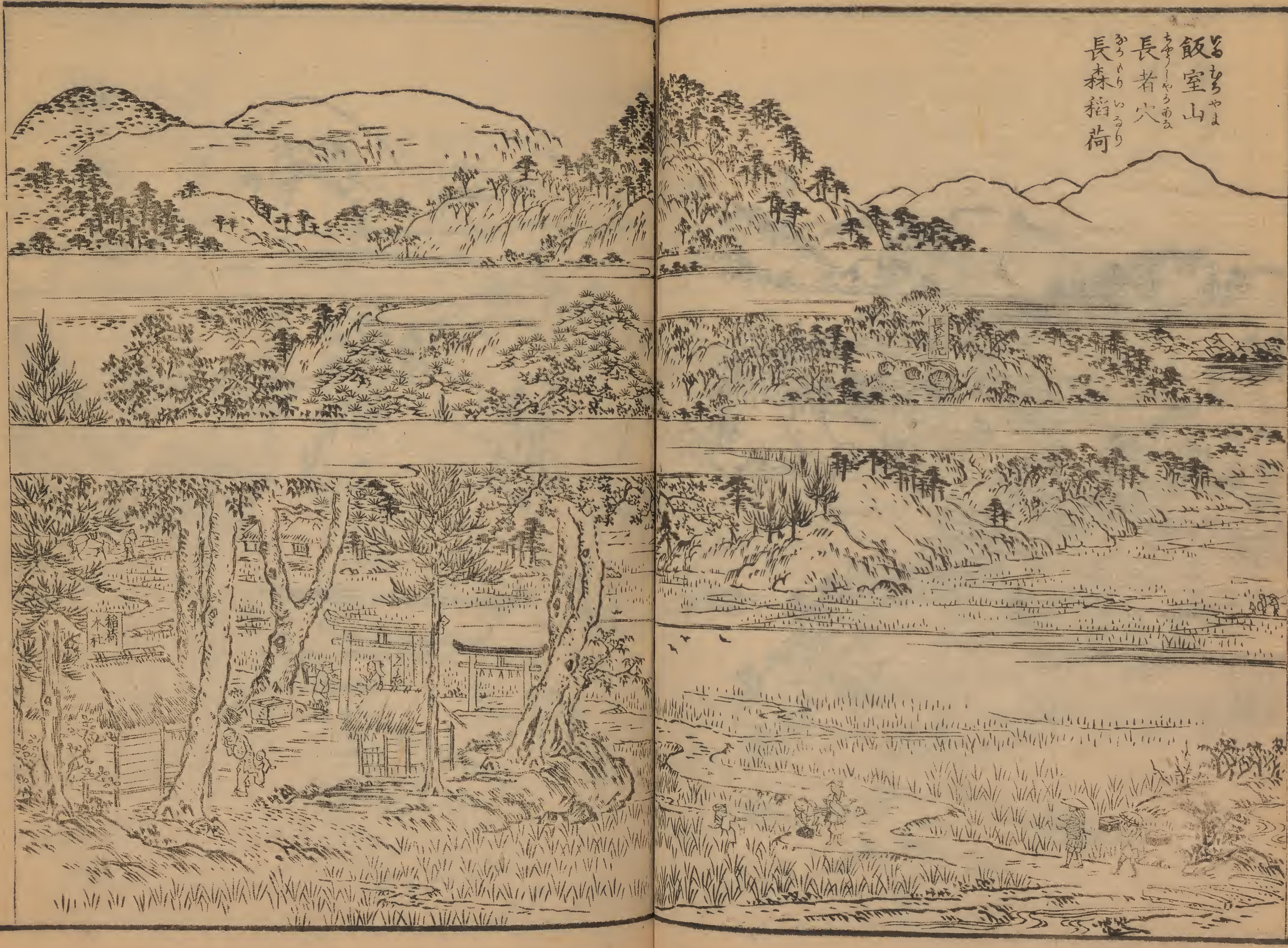
経塚　寺より後の方用水堀を越て一丁あまり艮の方畑の中にあり少き岡の上に三囲ばかりの老樹あり往古良弁僧都此所に仏経を埋め松を植て印とせし此樹下に古碑六枚あり一ハ上に梵字を刻し下に六字名号を記し左右に明応六年巳正月十六日とあり又一ハ上に梵字を刻し下に阿闍梨良弁と記し左に明応三年壬申六月十一日とあり又左に自作是念以何令衆生得入無上道速成就仏身とあり其余の四枚ハ缺損して文字読得べからず

松本山廣福寺　昔ハ稲毛山と号しけりといふ菅村の内府中往来の道よりも右の方四町ばかりにあり新義の真言宗にして三ツ濱の高勝寺に属せり本尊五智如来ハ座像九尺計ありて開山ハ慈覚大師中興ハ長弁阿闍梨と号す　安貞元年丁亥八月十日化せし

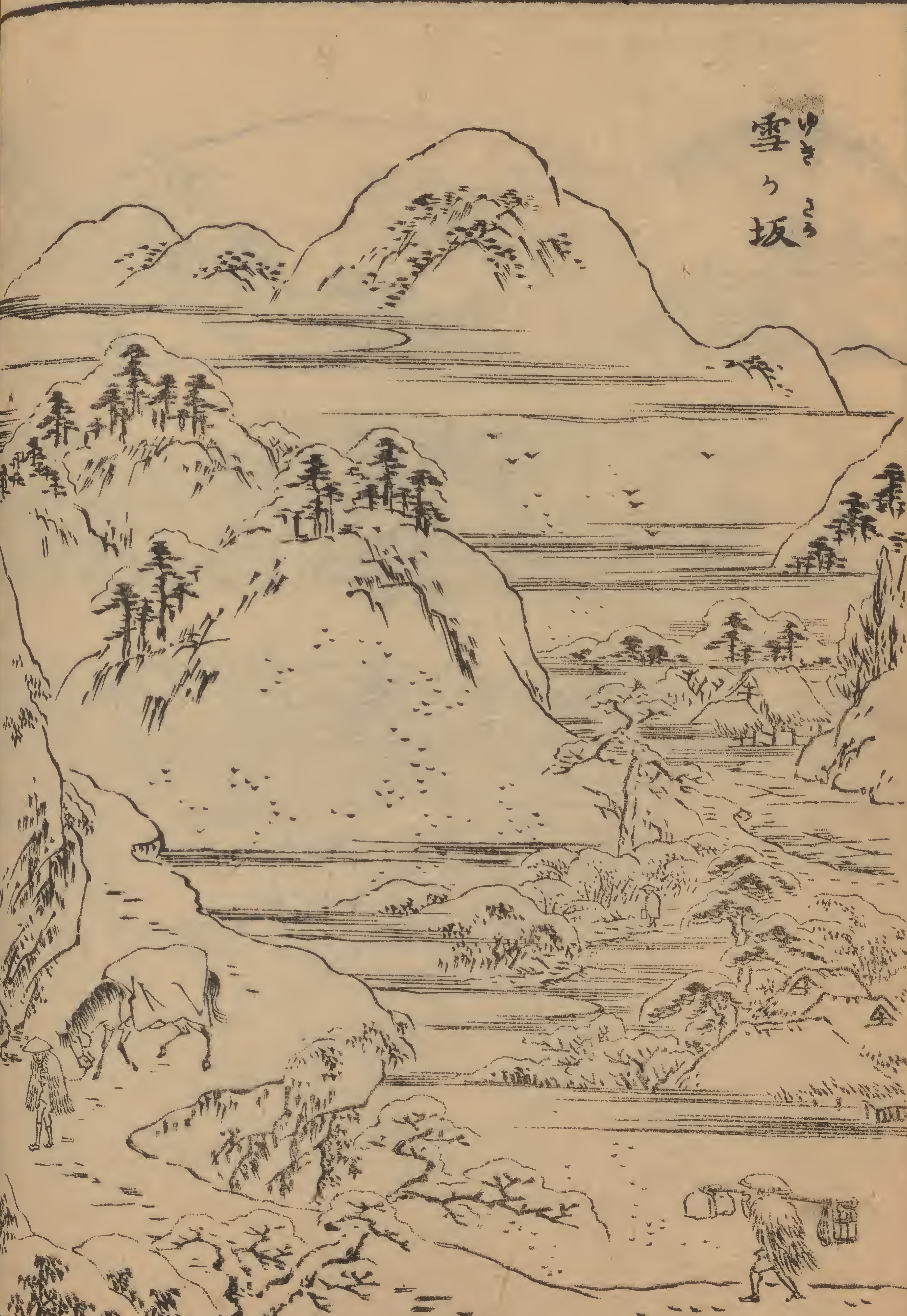
観音堂　本堂より後の山の上にあり本尊ハ正観世音の像五寸ばかりなりといへり胎中に稲毛三郎重成念持仏の観音の小像を収むるといへり此堂中に重成の肖像あり又ひだりに重成以下の位牌を置けり

稲毛三郎平重成禅門法名道全　名の上に丸の中に上羽蝶の下に一文字の紋を畫けり
元久二乙丑年六月廿四日


韋駄天山
廣福寺
稲毛塚
廣福寺
本堂



飯室山
長者穴
長森稲荷
稲荷本社



其餘重成の父小山田別當平有重法名寂照同舎弟榛谷四郎平重朝法名諦悟同甥の榛谷太郎平重秀法名蓮風同小次郎平重秀法名如月一ツ子小澤次郎平重政法名貞悟等以上五人の靈牌ありいつれも元久二年乙丑六月二十三日とあるも又同し形の靈牌に森五郎平行重法名玄理と注せしものも缺されとも没卒の年月忌日を注さす追て考ふへし

按に元久二年六月北条時政の室牧の方小山朝政か讒訴を請け重忠父子を誅さむと計議ありて同廿二日由比濱に於て畠山六郎を誅す同日申刻二俣河に於て重忠愛甲三郎季隆か箭に中りて誅せらる後小次郎重秀か所為に郎従等自害す翌る廿三日又鎌倉中騒動す三浦平六兵衛尉謀て榛谷四郎重朝同嫡男太郎重季次郎秀重等を経師か谷に誅す稲毛入道ハ大河戸三郎か為に誅せらる子息小澤次郎重政ハ宇佐美与一に誅せらる由東鑑にみえたり何れも此時死亡の人々にして重成の一族なる故に當寺に靈牌を置るへし又按に榛谷太郎當寺靈牌にハ重秀とあり大系図東鑑等にハ重季とす同小次郎靈牌にハ重秀とし大系図にハ季重に作る孰か一の考

一室圓如大禪定尼

建久六乙卯年七月上四日

か〻く注せし靈牌もあり寺僧も其人を志らすといへり東鑑に因て考ふるに即稲毛三郎重成の室なること明けし

東鑑曰　建久六年乙卯六月二十八日辛巳稲毛三郎重成妻北条殿息女於武蔵國病悩太危急之由飛脚到着下略

同書曰　同年七月四日丙戌稲毛三郎重成妻於武蔵國他界日來病悩頻雖加醫療終被侵風病尋重成不耐別離之愁頗倦勇敢心忽遂出家云云

稲毛三郎重成墓 觀音堂の後の方山の上にありて小き五輪の石塔にして半土中に埋れたり
當寺境内ハ櫻樹多く春時爛熳たり故に近邑の土人開花の時を待得て此地に至り宴を催し遅々たる春の日も於暮惜く思ふなるべし

韋駄天宮 廣福寺の前の小路を隔て向の山の中腹にあり廣福寺奉祀するところにして韋駄天の尊像ハ廣福寺の佛殿に安置せり祭礼ハ九月十五日に修行す

按に此地の小名を稲の目と称ふ識人云延喜式神名帳に武蔵國男衾郡稲貴神と云云又神名帳頭註に稲乃貴神ハ稲田姫なりとあり疑らくハ當社往古ハ稲乃貴社ありしを後世稲田姫と韋駄天とを混して誤りたるなるへし歟とのへりしハ稲毛も又稲の目の誤りなるらん歟

升形山 廣福寺より南の方の後の山を云 稲毛入道重成居城の旧趾にして山頂八町四方ありて升の形状をなすに依て号く重成ハ小山田別當有重の子北条時政前腹の女の聟にて秩父大夫重弘が男重忠従弟にして頼朝公の幕下に属し稲毛の地を所領とせり然に重成ハ重忠と日頃不和なるより牧の方と共に時政に讒しけれハ元久二年乙丑六月廿二日重忠野心ありとて時政勢を向けて畠山一族を誅伐せり重成親族の好を忘れ重忠を讒害せしかハ天道の罪遁かたくして終に和田義盛大河戸三郎宇佐美与一等をして武蔵國へ發向せしめ同廿四日稲毛入道父子を誅せらるとなり 東鑑北条九代記等の書に見えたり

稲毛と称する地尤廣大なりしも登戸の渡より川崎の辺まての地をすへて稲毛領と称して往古ハ四萬八千石の地なりしといへり大平記に江戸遠江守同下野守伯父甥が所領稲毛庄十二郷とあり又小田原記に信玄江戸を廻りて小田原へ押寄むとするの条下に矢口の渡を越て稲毛の平間と云地へ十六郷を追補せしもあり又永禄二年北条家の分限帳に竹内木月小倉長尾鈴木小田中分鹿島田端宿中田分鹿島田中村分矢向平間深塚屋経久末長久本小田溝口平の村高田等いつれも稲毛の内とす證とすへし又同し頃北条家の武士行方彈正明蓮が家臣田島兵部左衛門之房横山式部弘成駒林図書定朝等皆此地に住しけりといひ傳ふ

飯室山 同所左の山續にして山頂に七面冨士浅間を勧請す

長者穴 同し山の東の裾にあり入口ハ一間四方ばかりなれとも窟中甚廣く同し程の巖室二り並びてあり土人も其名義を志らすといふ



長森稲荷社　同所四丁計を隔て菅生村府中往来の街より右の方蒼林の中にあり同所日蓮宗安立寺奉祀せり

祭神長森稲荷明神右星夜明神左海光耀明神 以上三神

眷族の神長現金狐神渡一銀狐神阿通相狐神阿参玄狐神阿権白狐神 以上五神

相傳元禄十年伊豫國宇和島の浪人相馬左仲といへるもの花洛にありし頃鳥羽縄手にして一人の美女に逢ふ其美女の云く我ハ伏見藤森長森明神の臣渡一銀狐神と称せりとて靈尓あり翌る十一年の夏四月廿日又神告あるに任せ江戸に至り麻布日ヶ窪に住る中原与兵衛といふ者の家に勧請なし大に奇瑞靈驗あり然に正徳五年の夏の頃左仲没せるの後一子加藤次といへる者此御神を譲請て尊信を終に元文五年十一月安立寺の主僧日現上人此地に遷しまゐらせて法華勧請の御神となせり 中原与兵衛か舞なりける有偶次兵衛といふ人此神を尊信し稲徳 [illegible]

宝物

雪ヶ坂 飯室山の南の續にして曲折して西へ下る坂路を云登戸の辺より平村辺への通道なれば頗る美景の地なり

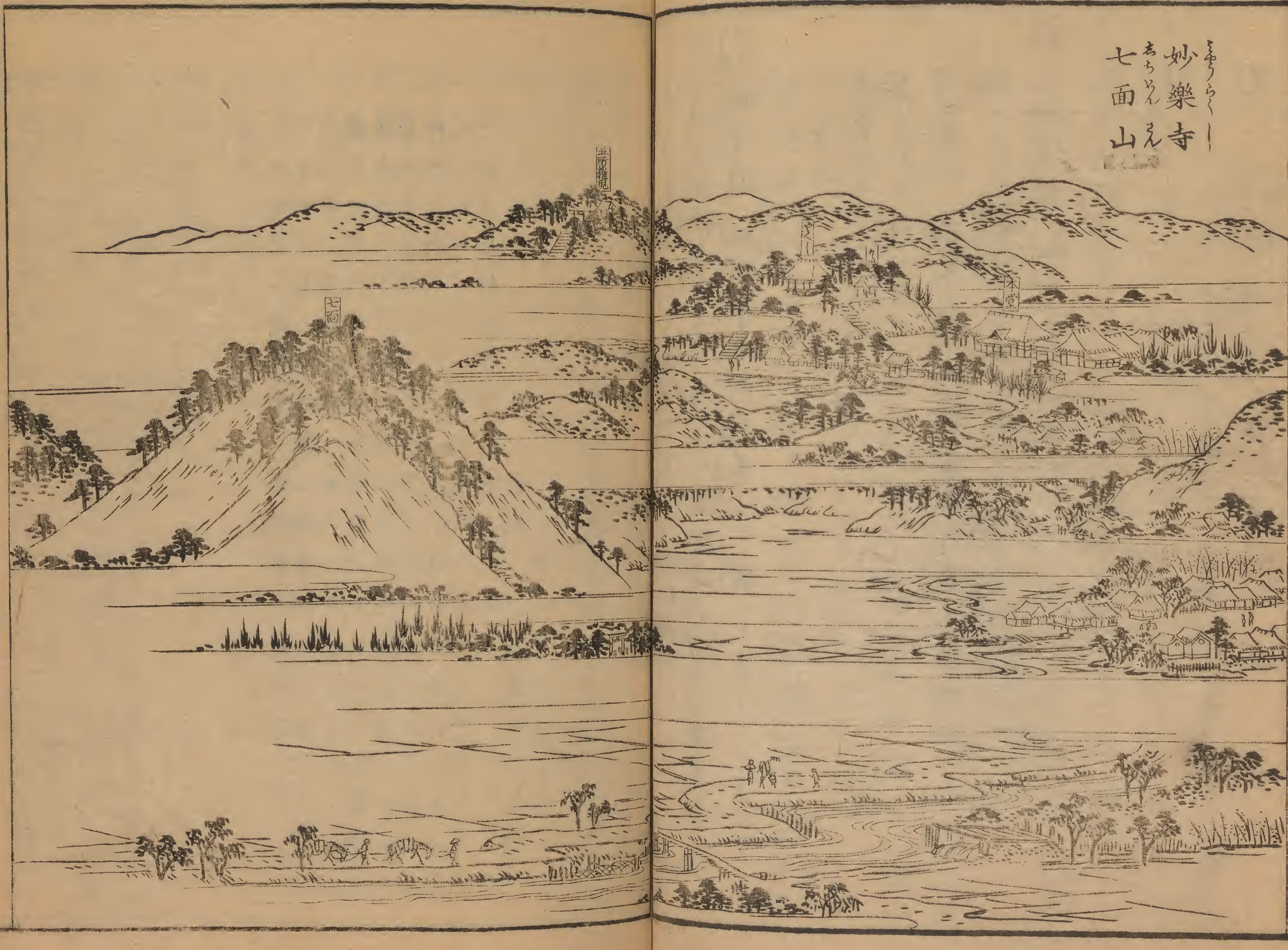
藥師堂 長尾村の内二子街道の右側山の上にあり本尊薬師如来の靈像は影向寺の本尊と同木にして慈覚大師の彫造なりと云秘佛にして常に拜する事なし（天台宗同所妙楽寺別當）

大師巖室 土人大師穴と称ふ藥師堂の山の後西向の所にあり入口は一間四方ばかりあり空中は二間四方にして高さも相同し享保の頃一人の山伏心願のすぢありとて断食して此窟中に一七日の間籠ゐたりと云傳ふるのみ大師と称する所謂しりがたし（今窟中に青き秩石の古碑四五枚あり）

五所權現社 藥師堂の南の山續にあり祭神詳ならず神躰は何れも座像にして丈七八寸ばかり烏帽子を冠りたるさまの（或は）僧形のものもありて都て五躰なり（荒木彫にして古物なり形状見分がたし）毎年正月二日桃樹の枝を伐て弓とし箭を放ち旧式の祭事あり

杉山明神祠 相州厚木街道溝口の驛より左に入て十六町ばかり南の方久本邑にあり上の宮と称するは別當龍臺寺（天台宗深大寺に属す）（毘沙門堂の本尊は慈覚大師の作なり）の西の山續にありて其間一町余を隔つ下の宮も同じ寺の堂の左の方石階の上にあり祭神詳ならず當社は延喜式内同國都筑郡星川邑鎮座の杉山神社の摸なるべし祭礼は九月廿九日なり

稲毛藥師堂 野川邑の内府中往来の道より三丁許西にあり（此社へ觸穢の者詣れば必災ありとて土人甚恐怖せり）醫王山影向寺と号す（天台宗多麻郡深大寺に属せり）聖武天皇の御願にして行基大士開基を其後文徳清和両帝御再興ありて慈覚大師修造せり三帝の勅願両大師構営の靈場にして利益著し（此故に上古は僧坊百戸三箇寺九院ありて昼夜仕候しいとも盛大の寺院なりしと云）



妙樂寺
七面山

本堂本尊瑠璃光如来御頭ハ行基大師の作なりとぞ再興の本尊ハ座像長五尺慈覚大師の作なり
脇士日光月光天共に五尺五寸あり

影向石 又佛足石とも称す堂前右の方にあり垣をめぐらし入口に戸鎖ありて禊に人をして入しむ其石の大サ六尺四方石面ハ平かにして中真に一尺五寸計の凹なる所ありて常ハ水を湛へて上に家根を覆ふ是を醫王水と称し病ある者の服飲して霊験を得るといふ

影向石之碑 入口の左に建らる其文左のごとし

影向石碑

嗚呼神道之妙聰明正直也哉此地堂構社甞天平之年初基焉 文德帝之御宇中興焉悉因玉造云有石象凹清泉常滿一飲其水則沈痾盡愈人々至誠所以感於神也矣余曾患眼也多年矣醫藥極術而未得其驗祠至此禱之則變明漸愈雖未如平人焉大半獲快矣鳴嚀靈泉之妙河潤千果也哉敬拜神靈之感德而片石以識不朽且表尊信之志也矣

延享丙寅季秋 東都法眼挂川先生門人和州城下郡大泉村森本冝直立之 東武

菊池政房代撰
平林惇信書

縁起曰天平十一年己卯九月十二日寅の尅に至て聖武天皇の妃光明皇后是なり不比等の大臣の二女なり眼に御悩あり天皇自薬師佛を御祈念ありしに翌年辛辰二月十二日の夜一人の沙門忽然として天皇の御前に来り告奉りて曰く武蔵國橘樹の里に和名抄橘樹郡の中に橘樹と云る地名を記したり今此地名亡ひたりといへども疑らくハ此あたりを云しなるべし一の霊石あり中心に水を湛へたり佛在世の時佛此霊石に向ひ三國に飛行して永く有縁の地に止るべしと云々然に其石忽然として飛移し此日本の地に移て彼地に止まり件の霊石ハ釋尊の御足を捧げまし大蓮花の其一葉を踏とゞめて末世に残し置給ふ所實に奇特の霊石にして彼地も又霊佛安座の勝利なり早く一の伽藍を建立し醫王尊を安置し給ハゞ皇后の御悩立所に平愈あるべし殊更王城の鎮護として國土豊饒なるべしと坐を立かと見えて其行方を見失ひ給ふ天皇此奇特をあやしめされ行基菩薩に薬師佛彫造の勅ありて又武蔵國に勅使を下し給ふ同年四月八日勅使當國に下向ありて此霊地を探り得給ひ竟に伽藍造立



稲毛（いなけ）薬師堂（やくしどう）

ありて又行基菩薩ハ良材を得て薬師佛の尊像を彫刻しまふ
此地を去る事五十余町巽の方小倉と号る地に一の池あり此間夜毎に竜燈をさゝく又后の池悩も四月八日より廿日ころまで竜燈あかり 佛堂造立落成の
後橘樹郡の地を以て寄附しまふ時に天平十二年庚辰十一月
なりその後文徳天皇の御宇に當て惟喬惟仁御同胞の太子
御位定の時慈覚大師惟仁皇子の為に種々の祈ありして
天安元年丁丑の八月當山に勅使を立らる一堂塔伽再営ありまひ
翌年戊寅初秋悉く落慶して舊観に復せ同年八月本尊を京
師より移しまふ 本尊ハ駿河國青島の里に至てまふ夜自ら光り當山辰巳の方の大盤石の上に立せまふ人く奇異とす則影向石是なり
其時大師曰く我此山の躰をみるに霊石霊水四の谷四の峯あり
是八葉胎蔵の徳を備へて末世に至る迄二世の悉地圓満を
為き相ありとて勅使と共に帰洛の後奏聞ありしかハ天皇再ひ
改めて橘樹郡を寺に充しむ此年の春三月竟に惟仁太子位に
つかせまふ 清和帝是なり 是偏に此本尊の衛護のよろしくあつてしかバ
なりしんとて威徳山と号けられ近江國蒲生郡の地を御寄
附の宣旨ありしとのふ

十三塚 土人ハ十三本墓と呼べり野川村の耕地の中此所彼所に
散在せり雑樹茅草茂まり相傳ふ新田佐兵衛佐江戸遠江守が
為に伐まれて矢口の渡ふて亡ひまひし時随ふ所の家臣の墳墓
なりといへども詳ならず

舟田 子母口村の内府中道の右にあり橘明神の神田にして長
二十歩あまり幅十四歩あまりある水田なり舟の形にして其田あまた
悉く陸田なり舟河原と称する地ハ社より十町ばかり東に當りて
今ハ民村の字となれり 次の橘明神の条下と合せ見るべし

橘明神社 同所府中道より四町あまり右の方山の上にあり 別當ハ
真言宗にして蓮乗院と号す祭礼ハ隔年九月九日に修行す
祭神ハ弟橘媛を祀ると云神體ハ一尺三四寸計ありて男躰女躰二

十三塚



軀を安置せり（女躰ハ弟橘媛 男躰ハ日本武尊）勧請の始詳ならず此地の人他邦へ出る事ある時ハ必先當社に詣て然して後發足せされハ路中過あり

とて大に恐怖せり

古文書一通（子母口村の里正伊藤氏の家に蔵す子母口昔ハ渋口なりしより此書によりて明けし）

渋口郷目録

一町　大戸宮　神田

二段　立花宮　神田

領家方　能登出作

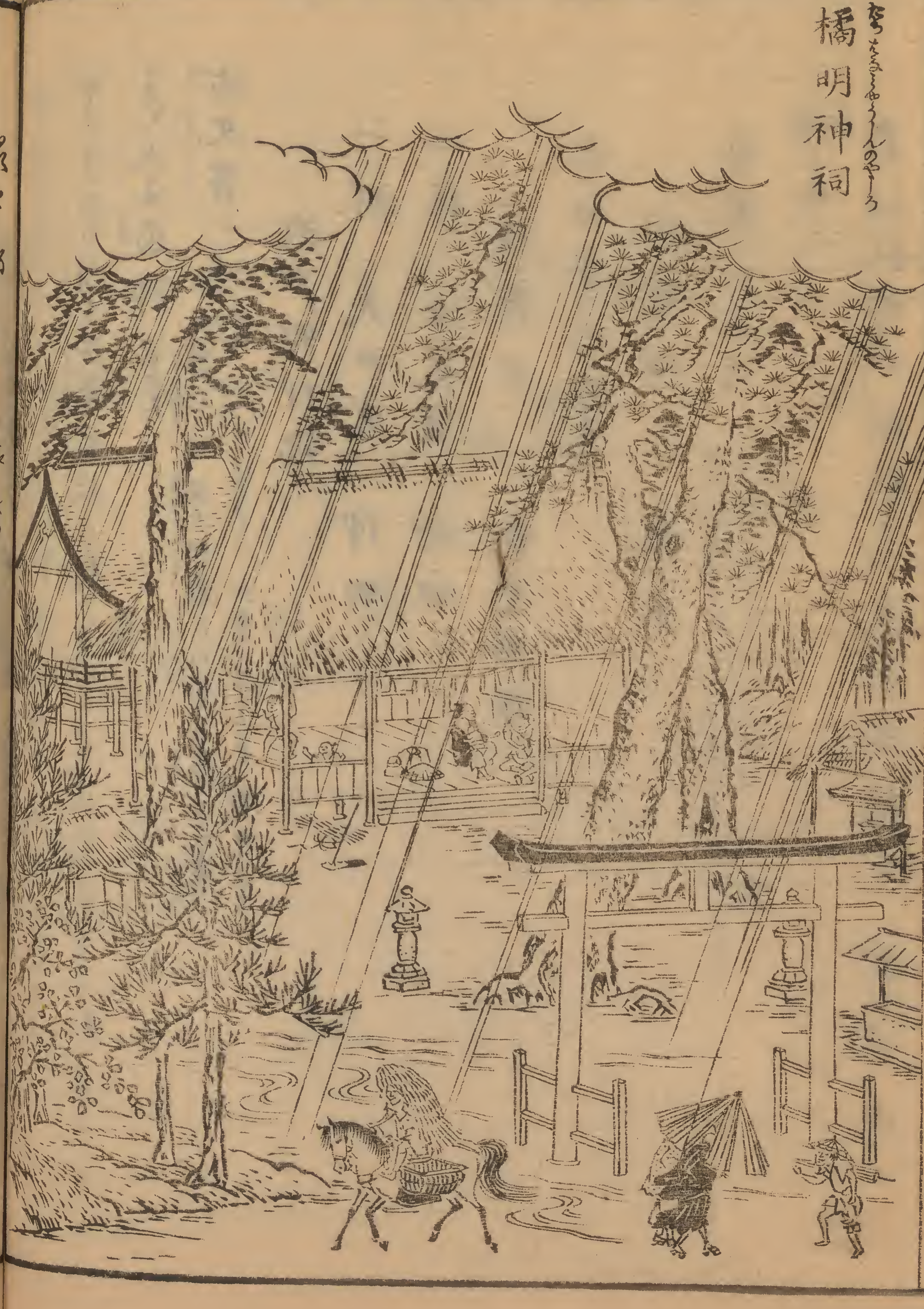
宇田壹町四反

田壹町　散在

合貮町四反（此内四段小せきめんゆるゝ先のごとく 以上一貫貮百三十七文　分銭）

以下略之

岩松礼部代國经ナス武蔵國稲毛ノ新庄ノ内



濱口ノ郷ノ事任セ御下知ニ為ニ差遣シ候者ノ處
沙汰ヲ付シ下地ヲ國役ニ候テ江戸ノ蔵人入道
弟全同信濃入道三貞同ク四郎入道道儀等
幸ニ為ニ勢ヲ擇城郭ヲ為是非ノ擬及合戦ニ之間
不能ニ相渡ニ若此等偽ヲ申ニ者
八幡大菩薩六所大明神ノ御罰ヲ可蒙候ニ以此
旨ヲ可有ニ御披露候以此恐惶謹言

正德元年七月廿三日　　沙弥　　　在判

進上　御奉行所

相傳徃古日本武尊東征の時此地より發船なしたまへりと云
先に挙る所の記河東其同しなりと云上古ハ品川神奈川の地共にひとつの海なりしとかり
或ハ武尊此海中風浪の難に
逢ひし頃橘姫の御衣及ひ御冠其の具抔此山の下に漂着せし


のぼりとしゆく
登戸宿
善立寺
登戸宿
光明院

登戸渡



ども云てその説一なりし凡 舟田もその渡船の着てありし旧跡なりと云

右近屋敷 社地の右にあり農民藤七といふ人居住す右近古ハ当社を奉祀の者なりしが藤七ハ其末裔なりとて今猶連綿として子孫繁昌せり

左近屋敷 同しく社地の左にありて右近屋敷と共に除地なりしかれども左近屋敷の方ハ今畑となりて人居ハあらず

姫神廟 社地より二丁ほど東は当まで山の中腹にあり 五六歩の地を封して茅篠の類鬱茂せり

相伝日本武尊東征の時此海上逆浪の災に逢給ふ弟橘姫の御衣及ひ冠の具なと流れ寄たりしを土中へ収めし旧跡なりとぞ

大戸明神 橘明神の社より後へ二町あまり田圃を隔て西の方丸山の上にあり蓮乗院兼帯す祭神大戸乃辨神を祀ると云 神世七代の中二柱の神なり則女神にまりして男神を意冨斗能地神と申なり 神躰ハ一尺三四寸ありて男女の容貌にして二軀あり 按に男神形ハ意冨斗能地神女神の形ハ大斗乃辨神の神影なるへし 祭礼ハ隔年九月九日に修行せり

龍宿山最明寺 金剛院と号丸子街道の西小杉邑にあり新義の真言宗にして江戸愛宕下の真福寺に属せり大日如来の木

最明寺（さいみやうじ）

回國雜記

まりこの里にてよめる

東路乃まりこの里に行かゝりあしもやすめす急く旅かな

羽林との和歌にいそくと云く

道興准后



像を本尊とす北條時頼公の創建なりと云傳へて堂宇に
三鱗の紋を附たりしも元禄の頃洪水の災にかゝりて旧記を失ふといへり
普照山壽源寺 唯称名院と号す南加瀬村岡の中腹にあり浄
土宗なり四十六世念誉覚栄和尚今の堂宇を営建して坐像
丈六の観音を安置せり當寺梁牌の銘に建武元年甲戌創
建せしとて往古ハ加瀬山智恵光院新如来寺と号せしとなり
開山ハ良山上人と称す十一世良察上人の頃寛正元年庚辰兵
火の為に亡ひたりとなり
東鑑曰 承久三年辛巳六月十四日宇治橋合戦手
負人々 中加世左近將監同弥次郎死了云云
小杉御殿地 最明密寺の大門の傍農家の後園の地其旧跡
なりと云 慶長十三年に御造営ありて其後万治三年に破却せ
られしと云 則此辺省耕の為に設ありし御殿なりとぞ
按に永禄二年小田原北条家の分限帳に小菅大炊助と云名あり又同書に
小菅摂津守稲毛小田村の地を領すとあるも小菅正字なるべし小田原記に





中丸子（なかまりこ）
羽黒権現（はぐろごんげん）

大永四年正月十三日上杉の家臣大田源六同源六郎謀反を起し小田原へ相図を定め氏綱伊豆相模を引卒せしか江戸の城ハ上杉修理大夫朝興居住しかも居なから欺をうけむ武略なきに似たりとて品川小杉へ打向て敵をまり川とあるも此地のことをいへるも

山王権現社 上丸子渡口より五町ばかり西南道より左の小路にあり

祭神大己貴命一座なり祭礼ハ六月十四日神主山本氏奉祀す 此山本氏祖先を山本平内左衛門と称せり往古當社勧請の頃近江國より此地に遷り住すと云 相傳人皇三十代欽明天皇の御宇庚申の年元年なり近江國坂本より移しまつるといへりと云 後平重盛公上下の丸子及ひ今井等の地を當社の神領に寄附あるしとなり 其頃重盛公奉納の短刀と称するものあり又重盛公の印と云傳ふる物あれとも今秘してゆるしなしといへり 文明八年當社焼亡ありて旧記を亡すといへり 小田原北条家今二十石の神領を添ふ の古文書二通今猶存せり

羽黒権現 稲毛山王より八町ばかり南の方中丸子村にあり 別當ハ真言宗にして瑠璃光山無量寺と号 相傳天正年間羽州羽黒山よりを勧請すと云く 本地佛弥陀薬師観音等の木像を安置す行基大士の作なりといへり 土人云昔奥州會津若松の産にて小町三蔵といへる馬追あり江戸に住ける年久しく中風の病に侵され半身不遂にして竟に非人となりて此所彼所にさまよひ歩行其頃當社を己か栖とせしか承應三年甲午六月一日山伏一人来り告て曰く汝此社殿にあるときハ其身甚穢らはし早く離去れ若ハ汝か姿をあらため琉漱と号く同四年乙未正月十一日當社の琉海と改名しとあり病故に全快せりしかハ神恩を報しまつらんか為此地にありて朝夕神前へ香花神燈を捧けまつり生涯此神に仕へまつりしとあり 御神の霊示によりて 華表の額に羽黒大権現と書せしを朝鮮國雪峯の筆と云

丸子渡口 相模街道にして其邑上中下に分れたるも 上丸子中丸子ハ多摩川より西にありて橘樹郡に属せり永禄二年北条家の分限帳に上丸子の地ハ千葉殿所領とあり又下丸子ハ荏原郡に属して川より東にあり下丸子ハ布施善三といふ人領なりし 同書にみゆ

東鑑曰 治承四年庚子十月十日以武蔵國丸子庄賜葛西三郎清重今夜御止宿彼宅清重令妻女備御膳但不申其實為御給構自他所招青女之由言上云云

回國雜記 まりこの里をよめる　道興准后

東路のまりこの里に行かゝりあしもやすめす急く旅かな

弱林といへる所にいたりて云々

按に四國雑記にまりこの里とあるによりて東海道鞠子驛と混じぬるなりあるべく
されども此記行に然るべき丸子のことをいへるあり此記行には芝の浦といへる所に
いたり此浦をすぎくあるいはえたるよりありこの里駒林に宿をかり新羽を立て
鎌倉にいたりしことを記せるを以て此所なることをしるべし